

山元町文化財調査報告書第 11 集

小平館跡 I

—小平地区宅地造成工事に係る発掘調査報告書—



小平館跡（1次調査）A区

平成 27 年 6 月

宮城県亘理郡山元町教育委員会

仙南ベニヤ株式会社

序 文

山元町は古くから身近に豊かな海と山を擁し、人々は恵まれた自然の中で生活を営んできました。その足跡は埋蔵文化財として、町内各地に散在しております。埋蔵文化財は、文献などには記録されていない地域の歴史を解明できる貴重な歴史資料であります。これらの遺跡は、先人が残した生活の証でもあり、かけがえのない文化遺産として将来の人々に継承するとともに、現在の生活の中において積極的に活用していくことが、私たちに課せられた責務であると考えております。

しかし、土地利用と深く結びつきの強い埋蔵文化財は、絶えず開発事業によって破壊・消滅の危機にさらされております。このため、当教育委員会としては、開発関係機関等との協議を通してこのような貴重な文化財を保存し、後世に伝えることに努めているところであります。

今回の小平館跡の調査は、山元町小平地区の宅地造成工事に際し、事業主との協議・調整に基づき、平成24年度に当教育委員会が実施したものであります。今回の発掘によって、中世以降と考えられる人々の生活の跡が確認され、山元町の歴史を考える上で貴重な発見となりました。

本書は、この調査成果を収録したもので、地域における歴史解明の資料として広く活用され、埋蔵文化財の保護と理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査に際しご協力をいただいた関係機関の方々、また、直接調査にあたられました皆様に心から感謝申し上げます。

平成27年6月

山元町教育委員会
教育長 森 憲一

例 言

1. 本書は、宮城県亘理郡山元町小平字北地内に所在する小平館跡（第1次調査）の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の発掘調査は、小平地区宅地造成工事に伴う事前調査として行ったものである。発掘調査・整理作業・報告書作成に係る一連の業務は、平成24・26・27年度に、調査原因となった事業主体者である仙南ベニヤ株式会社から業務委託を受けた山元町が実施した。
3. 本遺跡の発掘調査と整理作業は、山元町教育委員会が主体となり、文化財担当部局のある生涯学習課が担当した。小平館跡（1次調査）の現地発掘調査・報告書作成業務を行った平成24・26・27年度の職員の体制は下記のとおりである。

教 育 長 森 憲一
課 長 齋藤 三郎
班 長 武田 賢一（H24）、阿部 正憲（H26～）
主 事 山田 隆博
主 事 丹野 修太（任期付職員）
調査補助員 藤田 祐（H24～H26）、渡邊 理伊知（H24）、佐伯 奈弓
発掘作業員 相原 一智、飯川 幸男、石井 進、伊藤 清、伊藤 成夫、太田 千佳子、及川 博子、
小野 和喜子、後藤 征郎、齋藤 健二、佐藤 明、白鳥 浩二、立谷 重晴、南條 義博、
深澤 久美、増川 悠記、三浦 長、森 忠男、矢吹 共子、渡邊 洋子、遊佐 豊美、
横山 真、渡部 修
整理作業員 及川 博子、渡邊 洋子

4. 発掘調査、報告書作成に際して、以下の方々からご指導・ご助言・ご協力を賜った。
宮城県教育庁文化財保護課、仙南ベニヤ株式会社、小平区（敬称略）
5. 石器の石材については、実測者が肉眼観察を行った。
6. 現地発掘調査について、指揮・監督を山田・丹野・藤田・渡邊が担当し、現地作業を発掘作業員、断面図の作成は及川・深澤・矢吹・渡邊（洋）が行った。
7. 本書の整理・作成にあたり、遺物の洗浄・注記・接合・復元・拓本は、佐伯が中心となり整理作業員がこれを助けた。遺物抽出については山田が担当した。
遺物の実測図作成は、土器類を山田、石器を藤田、土器実測図のトレースは佐伯、石器実測図のトレースは渡邊（洋）が行った。
遺構整理については、全般を丹野が担当し、断面図トレース、データ入力・校正を佐伯、図面修正・データ照合を佐伯・渡邊（洋）・及川が行った。
8. 本書で使用した測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第X系による。調査区の測量原点は以下のとおりである。方位は座標北を表している。なお、今回使用した座標値は、東日本大震災後の値を基本としている。

T4 : X=-223917.742、Y=2781.880、Z=16.577m

GK6 : X=-223899.221、Y=2886.217、Z=11.965m

GK7 : X=-223900.929、Y=2884.336、Z=12.012m

GK8 : X=-223911.560、Y=2872.929、Z=12.404m

GK9 : X=-223912.820、Y=2871.649、Z=12.489m

GK10 : X=-223921.380、Y=2863.030、Z=12.950m

9. 本書の第2図は、土地分類基本調査における1/50,000地形分類図「角田」をもとに作成したものである。
10. 本書の第3図は、国土交通省国土地理院発行の1/50,000の地形図を複製して作成したものである。
11. 本書で使用した土色の記述にあたっては、「新版標準土色帖2010年版」(小山・竹原1973)を参照した。
12. 本書で使用した遺構略号は、「発掘調査の手引き」(文化庁文化財部記念物課2010)を参考にし、以下の通りとした。
 SB: 掘立柱建物跡、SK: 土坑、SD: 溝跡、P: 柱穴・小穴
13. 出土遺物の登録番号は、以下の通りとした。
 C: 土師器、E: 須恵器、K: 石器
14. 遺構・遺物実測図の主な縮尺は下記のとおりで、それぞれ図中にスケールを付して示した。
 調査区全体図: 1/200・1/400、調査区部分図: 1/100、掘立柱建物跡: 1/100・1/200、溝跡: 1/80、
 土坑: 1/40、断面図: 1/40・1/50、遺物実測図: 1/3
15. 遺物実測図において、土器類の実測図については、須恵器断面を黒塗り、その他の土器を白抜きとした。
 また、黒色処理が施された土師器については、スクリーントーンにより示した。
16. 本書の出土遺物のうち、土師器については、成形にロクロを使用したものをロクロ成形・ロクロ土師器、
 ロクロを使用していないものを非ロクロ成形と呼ぶことにした。
17. 基本層序は、ローマ数字とアルファベット小文字を組み合わせで表記した。
18. 標高は、水準点を基にした海拔高度で示した。
19. 遺構内の傾斜の部分は「TTT」、後世の攪乱は「攪」と表記し、その傾斜部は「≡」で示した。
20. その他、発掘調査の方法等については、第Ⅲ章2にまとめた。
21. 本書の執筆・編集については、整理を担当した調査員の協議を経て、山田が担当した。
22. 発掘調査に伴う出土遺物および写真等の調査記録資料については、山元町教育委員会が保管している。

調 査 要 項

遺 跡 名 : 小平 (こだい) 館跡 (宮城県遺跡地名表登録番号 14020 遺跡記号 KD)

所 在 地 : 宮城県亶理郡山元町小平字北

調 査 原 因 : 小平地区宅地造成工事に係る事前調査

調 査 期 間 : 確認調査 平成25(2013)年2月18・19日

事前調査 平成25(2013)年2月21日～3月1日

調査対象面積 : 約 8,120 m²

調 査 面 積 : 約 1,020 m² 【うち事前調査面積 : 約 425 m² (A区 281 m²、B区 144 m²)】

調 査 主 体 : 山元町教育委員会

調 査 担 当 : 山元町教育委員会生涯学習課

山田 隆博 【山元町教育委員会 生涯学習課 主事】

丹野 修太 【山元町教育委員会 生涯学習課 主事 (任期付職員)】

藤田 祐 【山元町教育委員会 生涯学習課 臨時職員 (調査補助員)】

渡邊 理伊知 【山元町教育委員会 生涯学習課 臨時職員 (調査補助員)】

調 査 協 力 : 仙南ベニヤ株式会社

目 次

序文	
例言・調査要項	
目次・挿図目次・表目次	
第Ⅰ章 遺跡の概要	1
1. 遺跡の位置と地理的環境	1
2. 周辺の遺跡	2
3. 小平館跡の概要	7
第Ⅱ章 調査に至る経緯と経過	9
1. 発掘調査に至る経緯	9
(1) 事前協議	9
(2) 確認調査	9
2. 小平館跡(1次調査)発掘調査の経過	9
(1) 事前調査の経過	9
(2) 整理・報告書作成作業の経過	11
第Ⅲ章 発掘調査	12
1. 基本層序	12
2. 発掘調査の方法	14
3. 発見された遺構と遺物	15
(1) 溝跡	22
(2) 土坑	23
(3) ピット・掘立柱建物跡	29
①ピットの特徴と出土遺物	29
②掘立柱建物跡	38
(4) その他の出土遺物	42
第Ⅳ章 総括	43
1. 出土遺物の特徴と時期	43
(1) 土師器・須恵器	43
(2) 石器	43
2. 検出した遺構の特徴と時期	43
(1) 掘立柱建物跡及びその他の柱穴・ピット	43
(2) 溝跡	44
(3) 土坑	44
3. まとめ	44

引用・参考文献

報告書抄録

挿 図 目 次

第 1 図	山元町と小平館跡の位置	1
第 2 図	小平館跡周辺の地形分類図	1
第 3 図	小平館跡の位置と山元町内の遺跡分布	4
第 4 図	小平館跡の概略図及び小平家の墓碑	8
第 5 図	小平館跡(1次調査)調査区の位置	10
第 6 図	小平館跡(1次調査)A区・B区基本層序	13
第 7 図	小平館跡(1次調査)A区調査区全景	16
第 8 図	小平館跡(1次調査)B区調査区全景	17
第 9 図	小平館跡(1次調査)確認調査トレンチ全景	18
第 10 図	小平館跡(1次調査)調査区全体図	19・20
第 11 図	小平館跡(1次調査)A区・B区遺構配置図	21
第 12 図	SD 1 溝跡	22
第 13 図	SK 1 土坑	23
第 14 図	SK 2・3 土坑	24
第 15 図	SK 4 土坑	25
第 16 図	SK 5 土坑	25
第 17 図	SK 6・7 土坑	26
第 18 図	SK 8 土坑	27
第 19 図	SK 9 土坑	27
第 20 図	SK 10 土坑	28
第 21 図	SK 11 土坑	28
第 22 図	SK 12 土坑	29
第 23 図	小平館跡(1次調査)B区遺構配置図	30
第 24 図	小平館跡(1次調査)B区柱穴・ピット断面	31
第 25 図	小平館跡(1次調査)B区柱穴・ピット検出状況	32
第 26 図	小平館跡(1次調査)A区東半柱穴・ピット 遺構配置図・断面図	34
第 27 図	小平館跡(1次調査)A区東半柱穴・ピット 検出状況・断面	35
第 28 図	小平館跡(1次調査)A区西半柱穴・ピット 遺構配置図・断面図	36
第 29 図	小平館跡(1次調査)A区西半柱穴・ピット 検出状況・断面	37
第 30 図	SB 1～3 掘立柱建物跡完掘状況・柱穴断面	39
第 31 図	SB 1 掘立柱建物跡平面・断面図	40
第 32 図	SB 2 掘立柱建物跡平面・断面図	40
第 33 図	SB 3 掘立柱建物跡平面・断面図	41
第 34 図	小平館跡(1次調査)出土遺物	42

表 目 次

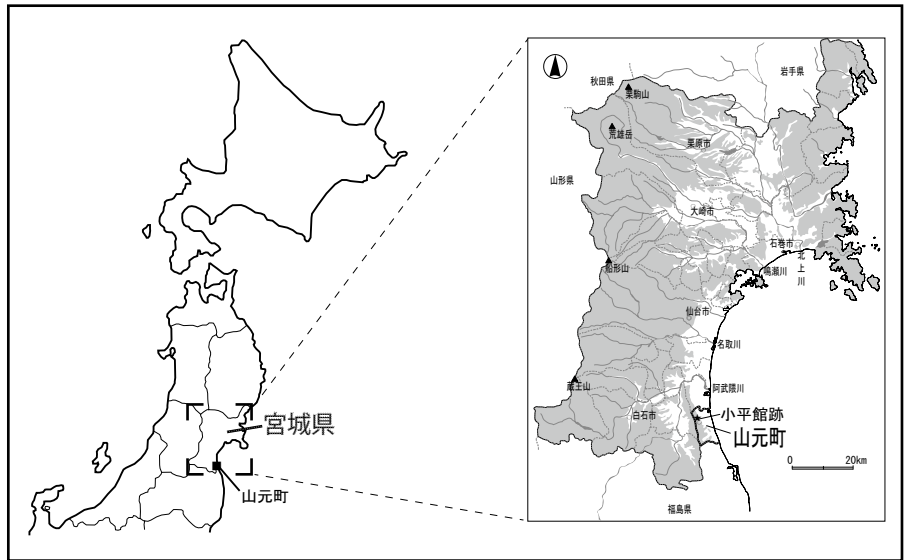
第 1 表	山元町遺跡一覧	5
第 2 表	小平館跡(1次調査)土坑属性表	23
第 3 表	小平館跡(1次調査)柱穴・ピット属性表	33
第 4 表	小平館跡(1次調査)掘立柱建物跡属性表	38
第 5 表	小平館跡(1次調査)掘立柱建物跡柱穴属性表	38

第I章 遺跡の概要

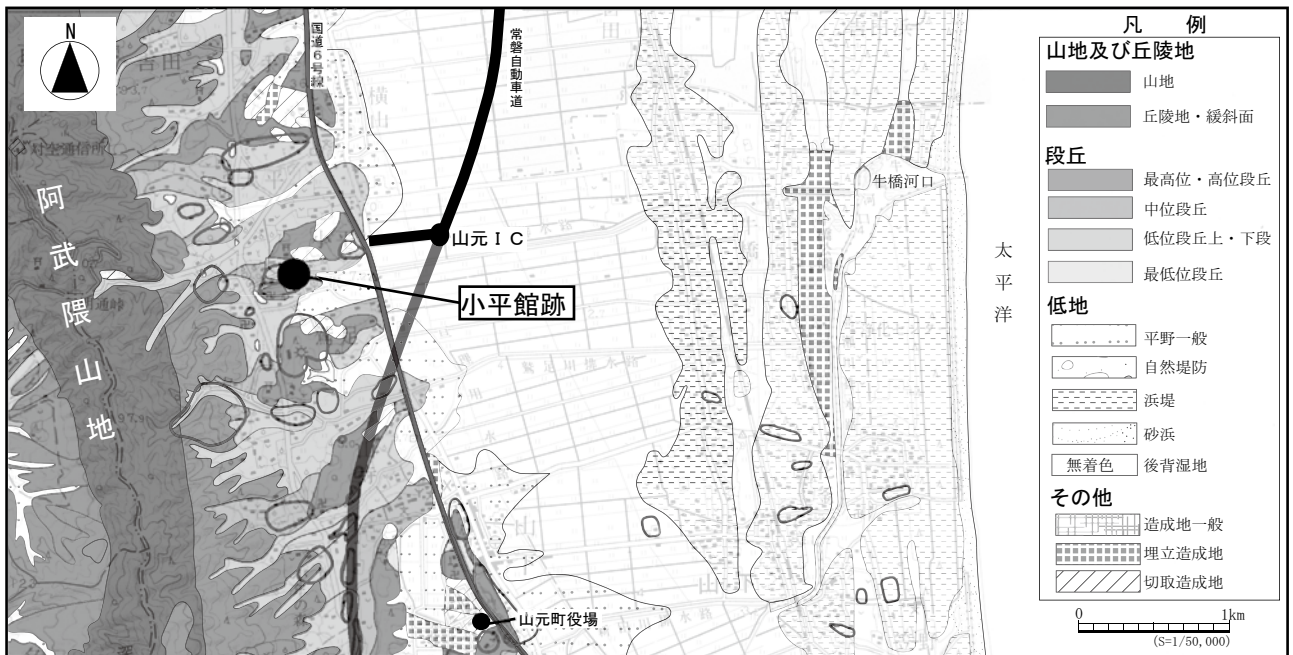
1. 遺跡の位置と地理的環境

宮城県亶理郡山元町は、仙台市から南南東に約40km離れた県南東部に位置し、地理的には仙台平野南端にあたる(第1図)。町の西側は福島県から延びる阿武隈山地の支脈、東側は太平洋で、これらの間には沖積地が広がっている。町内を北上する阿武隈山地は、標高200~300mの山地・丘陵地で、北端では阿武隈川と接する。丘陵縁辺は、阿武隈山地に源を発する小河川によって開析された櫛状の谷地形となり、谷底には谷中平野が形成されている。丘陵の東側には、沖積地を挟んで海岸線に平行した4列の浜堤(第II浜堤列・第IIIa~c浜堤列)が認められる(伊藤2006、藤本・松本2012)。

小平館跡は、亶理郡山元町小平字館・北に所在し、山元町役場の北北西約2.6kmに位置する(第2・3図)。遺跡は、阿武隈山地から東に延びる標高12~32mの中位・低位段丘上の平坦面・緩斜面に立地する(第2図)。遺跡の範囲は、東西380m、南北150mほどの広がりをもつ。現況は、山林、畑地、荒地、宅地、寺院、墓地である。



第1図 山元町と小平館跡の位置



第2図 小平館跡周辺の地形分類図

2. 周辺の遺跡

山元町には、現在まで 100 余りの遺跡が登録されている（第 3 図、第 1 表）。その分布は、地形的に阿武隈山地裾部、そこから延びる丘陵縁辺部、浜堤列周辺の大きく 3 つに分けられる。阿武隈山地裾部には縄文時代から中世に至る各時代の遺跡がある。丘陵縁辺部には縄文時代から近世までの遺跡が分布するが、その主体は古代と中世である。浜堤列周辺は近年の分布調査により発見された遺跡がほとんどで、古代以降の遺跡が分布している。

これまで山元町内の遺跡のうち本格的な発掘調査が実施された遺跡は、中島貝塚や合戦原遺跡、狐塚遺跡などわずか数例で、町内の原始から中世の歴史は未解明な点が多い状況にあった。しかし、平成 21 年度以降、町内では常磐自動車道山元 IC 開通に伴う周辺地区の開発や常磐自動車道（県境－山元間）建設工事、平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災に伴う復興事業などに関連した発掘調査が継続的に行われ、これまで知られていなかった山元町の歴史が少しずつ明らかになってきている。

以下、これまでに調査された代表的な遺跡について、時代ごとに記述する。

【縄文時代の遺跡】

前期の北経塚遺跡（10）、前期～中期の西石山原遺跡（84）、中期～晩期中島貝塚（4）、後期の谷原遺跡（67）、晩期中筋遺跡（80）などがある。

北経塚遺跡では、平成 15・21・23 年に調査が行われ、前期初頭の堅穴住居跡、土坑、遺物包含層、ピット群などが検出された（関 2004、山田・村上・山口 2010、山田・藤田・佐伯 2013）。

西石山原遺跡では、平成 22・23 年に調査が行われ、前期の土坑、中期末葉の堅穴住居跡などが検出された（初鹿野ほか 2012）。

中島貝塚では、昭和 53 年に調査が行われ、縄文土器・石器とともに貝殻、魚骨・獣骨が数多く出土した（山元町誌編集委員会編 1986）。

谷原遺跡では、平成 20・22・24 年の調査で、後期の掘立柱建物跡で構成される環状集落が確認され、この他、土坑や遺物包含層などが検出された（宮城県考古学会 2010・2012）。

中筋遺跡では、平成 24 年の調査で、晩期の遺物包含層が検出された（山田・藤田・佐伯 2015）。

【弥生時代の遺跡】

中筋遺跡（80）、狐塚遺跡（56）、館の内遺跡（9）、北経塚遺跡（10）、日向遺跡（68）などがある。

中筋遺跡では、平成 24 年の調査で、水田跡や遺物包含層などが検出され、中期前葉の鱸沼式～中期中葉の枅形冢式を中心とする土器群や石包丁、板状石器などが出土した。また、同時期の津波痕跡の可能性のある砂層も確認されている（山田・藤田・佐伯 2015、山田 2015a）。

狐塚遺跡では、平成 5 年の調査で、溝跡が確認され、中期後半の十三塚式の土器が出土している。（窪田 1995）。

北経塚遺跡・館の内遺跡・日向遺跡では、弥生時代の遺構は確認されていないが、遺物が出土している。北経塚遺跡では、平成 21・23 年の調査で、中期後半の十三塚式・後期の天王山式の土器のほか、石包丁が出土した（山田・村上・山口 2010、山田・藤田・佐伯 2013）。館の内遺跡では、平成 13 年の調査で、中期後半の十三塚式の土器が出土した（引地 2002）。日向遺跡では平成 23 年の調査で、中期後半の十三塚式の土器や石包丁が出土した（山田・藤田 2015）。

【古墳時代の遺跡】

前期の中筋遺跡(80)・石垣遺跡(69)・的場遺跡(70)、前期～中期の北経塚遺跡(10)、中期～終末期の合戦原遺跡(14)、後期～終末期の狐塚遺跡(56)・日向北遺跡(108)・日向遺跡(68)・谷原遺跡(67)・熊の作遺跡(53)・井戸沢横穴墓群(1)などがある。

中筋遺跡では、平成 24 年度の調査で、前期の土坑墓群が検出された(山田・藤田・佐伯 2015)。

石垣遺跡では、平成 23 年の調査で、前期の竪穴住居跡が検出された(山田・藤田 2014)。

的場遺跡では、平成 23・25 年の調査で、前期の竪穴住居跡・土坑・溝跡が検出された(山田・藤田・佐伯 2014)。

北経塚遺跡では、平成 21・23 年の調査で、前期の竪穴住居跡・方形周溝跡、中期の古墳周溝跡が検出された(山田・村上・山口 2010、山田・藤田・佐伯 2013)。

合戦原遺跡では、平成 2 年に調査が行われ、南小泉式期の大型の竪穴住居跡が検出された(岩見ほか 1991)ほか、平成 8・9 年の測量調査で前方後円墳を含む古墳群が確認されている(青山ほか 2000)。また、平成 26・27 年の調査で終末期の横穴墓群や竪穴住居跡が確認されている(山田 2015b)。

日向北遺跡では、平成 24 年の調査で、終末期前後の竪穴住居跡が検出された(山田・丹野 2014)。

日向遺跡では、平成 24 年の調査で、後期の竪穴住居跡、終末期の遺物包含層が検出された(山田・藤田 2015)。

谷原遺跡では、平成 22・24 年の調査で、後期の竪穴住居跡が検出された(宮城県考古学会 2010)。

狐塚遺跡では、平成 4・5 年に調査が行われ、後期の竪穴住居跡・竪穴状遺構・掘立柱建物跡が検出された(千葉 1993、窪田 1995)。

熊の作遺跡では、平成 25・26 年の調査で、後期～終末期の竪穴住居跡・掘立柱建物跡が検出された(宮城県考古学会 2013、初鹿野 2014・2015)。

井戸沢横穴墓群では、昭和 44 年に調査が行われ、調査された数基の横穴墓の特徴が福島県浜通り地方に点在する横穴墓群と類似することから、その関連性が指摘されている(佐々・志間・氏家 1971)。

【奈良・平安時代の遺跡】

館の内遺跡(9)、合戦原遺跡(14)、狐塚遺跡(56)、谷原遺跡(67)、涌沢遺跡(107)、日向遺跡(68)、石垣遺跡(69)、的場遺跡(70)、内手遺跡(83)、上宮前北遺跡(109)、向山遺跡(57)、熊の作遺跡(53)、北名生東窯跡(34)、犬塚遺跡(110)、新中永窪遺跡(111)、雷神遺跡(112)、内手 B 遺跡(115)、作田山遺跡(114)などがある。

館の内遺跡では、平成 13 年の調査で、規格的に配置された掘立柱建物跡や竪穴住居跡が検出され、墨書土器や製塩土器などが出土している(引地 2002)。

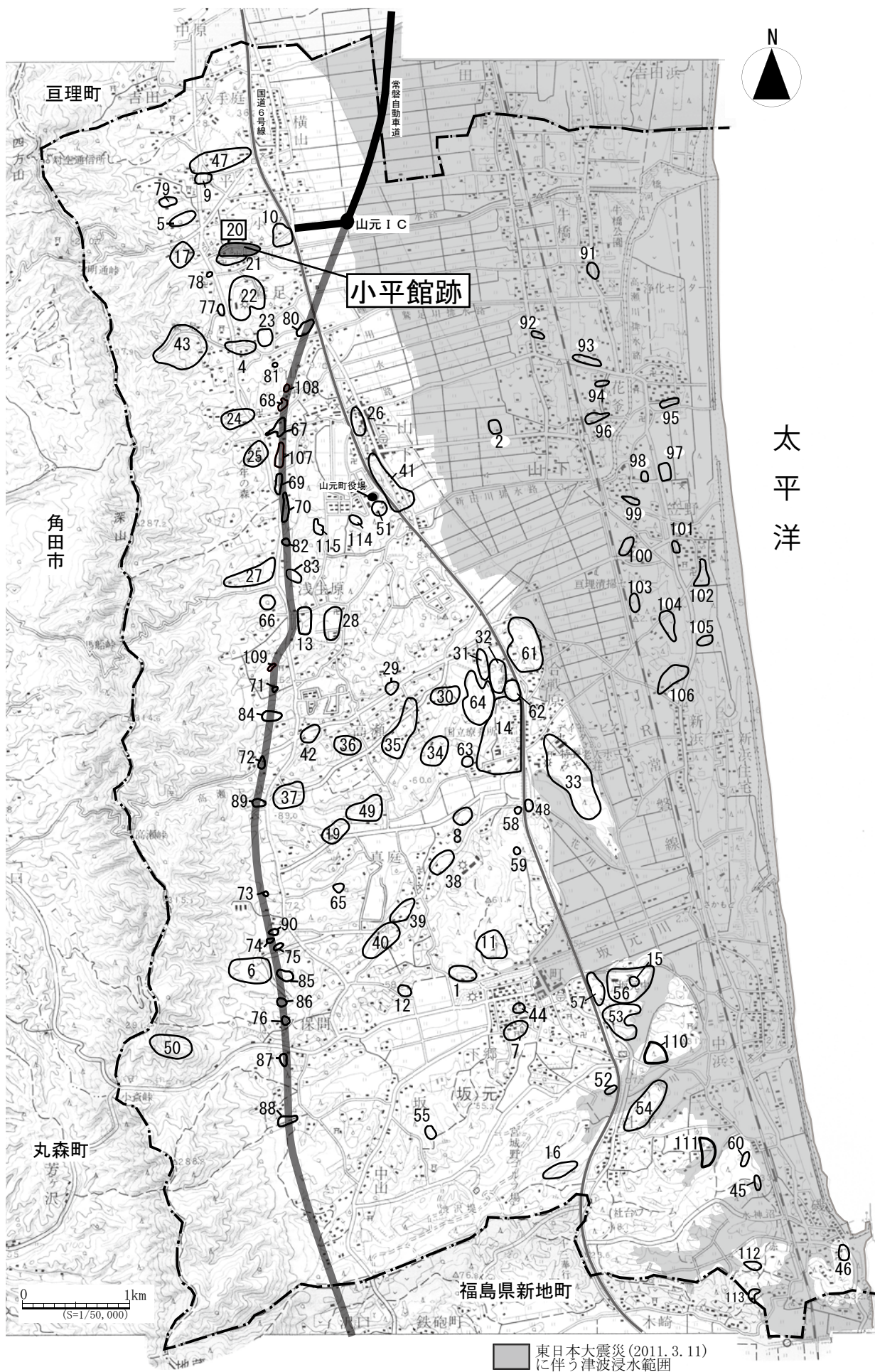
合戦原遺跡では、平成 2 年の調査で、奈良時代～平安時代の須恵器窯跡が検出され(岩見ほか 1991)、平成 26・27 年の調査で、製鉄炉跡・木炭窯跡・焼成土坑が確認されている。

谷原遺跡では、平成 20・22・24・25 年の調査で、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・大溝・土坑などが検出され、円面硯や風字硯が出土している(宮城県考古学会 2010・2012)。

涌沢遺跡では、平成 24 年の調査で、平安時代の集落跡や土器廃棄土坑、製鉄関連遺構が検出され、墨書土器や八稜鏡などが出土した(宮城県考古学会 2012、初鹿野 2013a)。

日向遺跡では、平成 24 年の調査で、8 世紀末～9 世紀初頭・9 世紀後半の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・遺物包含層が検出された(山田・藤田 2015)。

石垣遺跡では、平成 23 年の調査で、9 世紀後半の竪穴住居跡・竪穴状遺構、土器廃棄土坑が検出され、



第3図 小平館跡の位置と山元町内の遺跡分布

第1表 山元町遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	井戸沢横穴墓群	横穴墓	古墳後	58	卯月崎塚	塚	中世・近世
2	新田遺跡	散布地	古墳後・古代	60	東作経塚	経塚	中世
3	欠番	—	—	61	合戦原B遺跡	製鉄	古代
4	中島貝塚	貝塚	縄文中～晩	62	合戦原C遺跡	古墳	古墳中
5	味曾野横穴墓群	横穴墓	古墳後	63	北名生東B窯跡	窯跡	古代
6	影倉遺跡	散布地	縄文後・晩	64	大久保B遺跡	散布地	古代
7	葦首城跡	城館	中世・近世	65	北権現遺跡	製鉄	古代
8	上台遺跡	散布地	弥生・平安	66	山王遺跡	製鉄	古代?
9	館の内遺跡	集落	古代	67	谷原遺跡	集落	縄文後・弥生～中世
10	北経塚遺跡	集落・古墳・経塚	縄文前・古墳前・中世	68	日向遺跡	集落	古墳後～中世
11	愛宕山館跡	城館	中世	69	石垣遺跡	集落	縄文・古墳前 平安・近世
12	日向遺跡	散布地	古墳中・後	70	的場遺跡	集落	縄文前・古墳前 平安・近世
13	浅生原遺跡	散布地	縄文中・後、中世	71	上宮前遺跡	散布地	平安・中世
14	合戦原遺跡	集落・横穴墓 須恵器窯跡・製鉄	古墳中・後、古代	72	北山神遺跡	散布地	縄文
15	狐塚古墳群	古墳	古墳後	73	新田B遺跡	散布地	古代
16	一の沢遺跡	散布地	弥生	74	影倉B遺跡	散布地	縄文
17	清水遺跡	散布地	弥生	75	影倉C遺跡	散布地	古代
18	欠番	—	—	76	荷駄場遺跡	散布地	縄文
19	北鹿野遺跡	散布地	古墳	77	北遺跡	散布地	古代
20	小平館跡	城館・散布地	古墳前・古代・中世	78	北ノ入遺跡	散布地	古代
21	館横穴墓群	横穴墓	古墳後	79	味噌野遺跡	散布地	古代
22	山崎横穴墓群	横穴墓	古墳後	80	中筋遺跡	水田・包含層 墓域?	縄文晩・弥生中 古墳前
23	中道遺跡	散布地	縄文・古墳後	81	赤坂遺跡	散布地	縄文・弥生
24	石堂遺跡	散布地	古代	82	山王B遺跡	集落・散布地	縄文・近世
25	山寺館跡	城館	中世	83	内手遺跡	製鉄・生産	平安
26	作田山館跡	城館	中世	84	西石山原遺跡	集落	縄文前・中、平安
27	入山遺跡	散布地	縄文・古代	85	影倉D遺跡	製鉄	古代
28	下大沢遺跡	散布地	縄文前	86	荷駄場B遺跡	散布地	古代
29	宮後遺跡	散布地	古代	87	上小山遺跡	散布地	古代・中世
30	大久保遺跡	散布地	縄文・古墳・古代	88	法羅遺跡	散布地	縄文
31	館下窯跡	須恵器窯	古代	89	南山神B遺跡	散布地	縄文・古代
32	中島館跡	城館	中世	90	影倉E遺跡	散布地	縄文・古代・中世
33	戸花山遺跡	古墳・須恵器窯・ 製鉄・散布地	縄文・古墳・古代	91	北泥沼遺跡	散布地	古代
34	北名生東窯跡	須恵器窯	古代	92	泥沼遺跡	散布地	古代
35	室原遺跡	散布地	古代	93	畑合遺跡	散布地	古代
36	北の原遺跡	散布地	縄文早・前・後	94	北頭無遺跡	散布地	古代
37	南山神遺跡	散布地	縄文早・前	95	浜遺跡	散布地	古代
38	原遺跡	散布地	古墳	96	頭無遺跡	散布地	古代
39	浅生遺跡	散布地	古代	97	花笠遺跡	散布地	古代
40	南権現遺跡	散布地	縄文早・前、古墳	98	西北谷地A遺跡	散布地	古代
41	山下館跡	城館	中世	99	西北谷地B遺跡	散布地	古代
42	石山原遺跡	散布地	縄文	100	西須賀遺跡	散布地	古代
43	鷺足館跡	城館	中世	101	笠野A遺跡	散布地	古代
44	館下遺跡	散布地	弥生	102	笠野B遺跡	散布地	古代
45	大壇小壇十三壇	塚	近世	103	北中須賀遺跡	散布地	古代
46	唐船番所跡	番所	近世	104	狐須賀遺跡	散布地	古代
47	大平館跡	集落・城館	平安・中世	105	笠浜遺跡	散布地	古代
48	貝吹城跡	城館	中世	106	新浜遺跡	散布地	古代
49	真庭館跡	城館	中世	107	涌沢遺跡	集落	縄文・古代～近世
50	新城山古館跡	城館	中世	108	日向北遺跡	集落	古墳後・中世～近世
51	日向窯跡	窯跡	古代	109	上宮前北遺跡	集落	古代
52	作田横穴墓群	横穴墓	古墳後	110	犬塚遺跡	製鉄	古代
53	熊の作遺跡	集落	古墳後・古代	111	新中永窪遺跡	集落・須恵器窯 製鉄	古代
54	駒場原遺跡	散布地	古代	112	雷神遺跡	集落・生産	古代
55	川内遺跡	製鉄	古代	113	山ノ上遺跡	散布地・生産	古代
56	狐塚遺跡	集落・生産	古墳中～古代	114	作田山遺跡	製鉄	古代
57	向山遺跡	集落・生産	古墳・古代	115	内手B遺跡	製鉄・須恵器窯	古代

土器廃棄土坑からは墨書土器（「田」・「人」）が出土した（山田・藤田 2014）。

的場遺跡では、平成 23・25 年の調査で、9 世紀後半の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・焼成遺構が検出された（山田・藤田・佐伯 2014）。

内手遺跡では、平成 23 年の調査で、平安時代の木炭窯跡・横口付木炭窯跡が検出されている（初鹿野 2013b）。

上宮前北遺跡では、平成 24 年の調査で、平安時代の製鉄炉跡が検出されている（初鹿野 2013b）。

向山遺跡では、平成 25 年の調査で、奈良～平安時代の竪穴住居跡や鍛冶工房が検出されている（宮城県考古学会 2013、初鹿野 2015）。

熊の作遺跡では、平成 25・26 年の調査で、奈良時代～平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、門跡が検出され、「坂本願」「大領」「子弟」などの墨書土器や風字硯、石帯、木簡、木製品などが出土している（宮城県考古学会 2013、初鹿野 2014・2015、吉野 2015）。

北名生東窯跡では、昭和 37・38・52 年に須恵器窯跡の調査が行われ、8 世紀後半～9 世紀初頭の須恵器が出土した（鍛冶 1971）。

犬塚遺跡では、平成 25・26 年の調査で、奈良時代の竪穴住居跡・木炭窯跡・製鉄炉跡が検出された（初鹿野 2015）。

新中永窪遺跡では、平成 26 年の調査で、奈良～平安時代初期の竪穴住居跡・製鉄炉跡・須恵器窯跡・木炭窯跡・横口付木炭窯跡が検出された（宮城県考古学会 2014、初鹿野 2015）。

雷神遺跡では、平成 25・26 年の調査で、奈良時代の竪穴住居跡が検出された。

内手 B 遺跡では、平成 26 年の試掘調査で、奈良時代の須恵器窯跡などが検出された。

作田山遺跡では、平成 25 年の試掘調査で、古代の製鉄関連遺構が検出された。

【中世の遺跡】

北経塚遺跡(10)、谷原遺跡(67)、日向遺跡(68)、山下館跡(41)、鷲足館跡(43)などがある。

北経塚遺跡では、平成 21・23 年の調査で、13 世紀後半～14 世紀以降の掘立柱建物跡・井戸跡・土坑が確認され、中世の集落の存在が明らかになった（山田・村上・山口 2010、山田・藤田・佐伯 2013）。

谷原遺跡では、平成 22・24 年の調査で、掘立柱建物跡多数・井戸跡・土坑・溝跡などが検出され、中世の大規模な屋敷跡の存在が確認された（宮城県考古学会 2010・2012）。

日向遺跡では、平成 24 年の調査で、13 世紀後半～16 世紀の掘立柱建物跡・井戸跡が確認された（山田・藤田 2015）。

山下館跡では、平成 26 年に調査が行われ、平場・土塁・堀切が良好な状態で確認され、平場では掘立柱建物跡や柱穴列が検出された（宮城県考古学会 2014）。

鷲足館跡では、平成 24～26 年に調査が行われ、腰郭と柱穴列で区画された曲輪が確認され、掘立柱建物跡が多数検出された。

【近世の遺跡】

石垣遺跡(69)、的場遺跡(70)、山王 B 遺跡(82)、蓑首城跡(7)などがある。

石垣遺跡では、平成 23 年の調査で、近世の掘立柱建物跡・柱穴列跡・土坑・井戸跡で構成される屋敷跡が検出された（山田・藤田 2014）。

的場遺跡では、平成 23・25 年の調査で、17～19 世紀の掘立柱建物跡・土坑・溝跡・井戸跡で構成される屋敷跡が検出された（山田・藤田・佐伯 2014）。

山王 B 遺跡では、平成 22 年の調査で、掘立柱建物跡・溝跡・土坑が検出された（初鹿野ほか 2012）。

蓑首城跡は、戦国時代末期に築城され、元和2（1616）年以降、大條氏が長期間にわたり居城した城で、平成25・26年に二ノ丸跡の調査が行われ、掘立柱建物跡、井戸跡、土坑、溝跡などが検出された（宮城県考古学会2013）。

3. 小平館跡の概要

小平館跡は、亶理郡山元町小平字館・北に位置し、小平地区の鳳仙寺が所在する丘陵上に立地している。小平館跡については、延宝年間（1673～1681）編纂の『仙臺領古城書上』や享保13年（1728）編纂の『仙臺領古城書立之覚』に「小平城」、明和9年（1772）編纂の『封内風土記』に「古壘」として、下記のとおり記載されている。これらの文献によれば、小平館跡は小平村に所在する山城で、その規模は東西34間・南北11間の374坪、城主は小平兵衛とされている。

- ・『仙臺領古城書上』の記載内容

「小平村 山 一 小平城 同 三十四間 十一間 城主小平兵衛」

- ・『仙臺領古城書立之覚』の記載内容

「小平村 山 一 小平城 東西三拾四間 南北十一間 三百七十四坪 右城主小平兵衛ト
申者之由村老申聞候を以申上候」

- ・『封内風土記』の記載内容

「小平邑 古壘一。傳云。小平兵衛傳諱。不者所居。」

また、出典や詳細は不明であるが、大正6年（1917）に編纂された『亶理郡史』に、小平館跡の城主について以下のとおり記述されている。これによれば、館主は亶理館主であった亶理宗隆で、小平館に退隠して小平大閑齋と号し、伊達氏より長瀬、大畑、吉田、花釜、小平の5村を領有したとされている。

- ・『亶理郡史』第二十六章第二節の記載内容

「小平館主 亶理宗隆氏

宗隆は千葉下總介常胤が三男武石三郎胤盛十四代の後胤にして伊達家に仕へ亶理の館主たり宗隆二女あり一女は伊達植宗公に納れ側室と爲り元宗を生宗隆請ふて之を養ひ亶理家の嗣と爲す天正十九年遠田郡涌谷に移さる其の後宗隆致仕して亶理郡小平邑に退隠し小平を以て氏とし大閑齋と號す植宗公の内意に因り泉田式部景時が三男重隆を養ひ其の次女に配し以て小平家の嗣とす又宗隆は亶理郡大畑長瀬吉田花釜小平の五邑に於て高七千石の采地を領有す弘治二年七月二十一日歿す年六十四法名鳳仙院徹心大閑居士と稱し亶理郡小平邑鳳仙寺に葬る。

二代重隆小平兵衛遠江天正十五年六月十九日卒法名心嶺閑公居士三代小平修理元成は伊達政宗公に近侍し城州伏見在勤中文祿四年伊達家長屋に於て故あり市人を殺害し爲めに世襲の采地を没収せらる此時政宗公に謁し内命を受け紀州高野山に隠れ居る三年密かに徴されて仙臺に歸るも武石二右衛門と稱す豊臣秀吉薨去の後更に召出され小平太郎左衛門と改稱せり寛永十三年五月二十四日政宗公薨し給ひ同年六月十九日仙臺屋敷に於て殉死す年六十一仙臺市瑞鳳殿政宗公廟の側に葬らる。

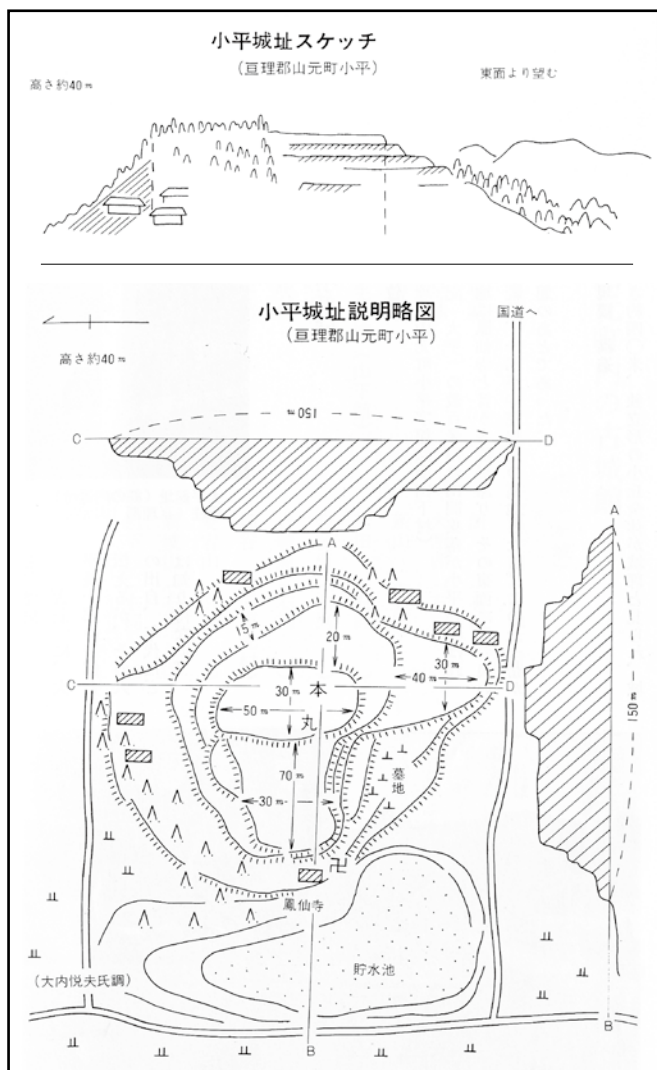
辭世 かさふれば六十のあまり夢さめて 君もろとも行く元の道
子孫を小平元勞と稱し現に神奈川縣鎌倉郡川口村片瀬に居住せり。」

この他、仙台領内の古城・館についてまとめた紫桃正隆氏によると、小平館跡は高さ40mほどの独立

形の円郭式山城で、東西 150m、南北 50m の平場が本丸、本丸を中心にして5~6段の壇がまわり、二の壇は特に広いことから二の丸の可能性を指摘している。また、その歴史については、古記などの記載から、小平館跡は亙理要害 14 世亙理宗隆が隠居したとされている館跡で、宗隆の一女が伊達植宗の側室に迎えられている点から、室町時代の天文頃(1550 年頃)のものと推定している(紫桃 1974)。

以上が小平館跡に関する史料・文献類である。これらの記載をまとめると、小平館跡の館主には小平兵衛や亙理宗隆などの説があり、その年代は、亙理郡史の記載や紫桃氏の推定から 16 世紀半ば~後半の可能性が考えられるが、その築城時期については、さらなる検討が必要であると思われる。館跡の構造・遺構については、これまで本格的な発掘調査は実施されていないため、不明な点が多い。小平館跡の所在する丘陵は、現在、寺院・墓地・宅地・畑地などに利用され地形改変が著しく、かつ、丘陵頂部は雑木が生い茂る山林となっているため、現状で当時の館に関わる遺構を確認することは困難な状態にある。紫桃氏の踏査による概略図(第4図)と現在の地形図(第5図)を照らし合わせると、少なくとも、鳳仙寺墓地が所在する丘陵東側付近の頂部周辺に主郭・副郭が存在していたと考えられる。

なお、大正5年(1916)には、神奈川県から小平家の末裔が鳳仙寺に訪れ、開祖宗隆の360年の法要を行っており、鳳仙寺境内に小平家の墓碑が建立している(第4図)。



小平館跡概略図(紫桃 1974 より転載)



小平家の墓碑
(小平区鳳仙寺に所在)

第4図 小平館跡の概略図及び小平家の墓碑

第Ⅱ章 調査に至る経緯と経過

1. 発掘調査に至る経緯

(1) 事前協議

平成 24 年度の下半期に入り、宮城県亘理郡山元町小平地区の宅地造成事業箇所と埋蔵文化財のかかわりについて、(株)仙南ベニヤ株式会社（以下、事業主）から山元町教育委員会（以下、町教委）に照会があった。町教委では、事業予定箇所の一部が周知の埋蔵文化財包蔵地である「小平館跡」に該当していたことから（第 5 図）、事業主へ対し、事前の協議を行う旨の回答を行った。

平成 24 年 12 月 26 日、「宅地造成計画と埋蔵文化財のかかわりについて」の協議書が事業主から町教委に提出され、同日、町教委では意見書を付し、宮城県教育庁文化財保護課（以下、県教委）に協議書を進達した。これを受け、上記三者による現地確認・協議を行った結果、事業の実施により、遺跡へ与える影響が高いと判断されたことから、平成 25 年 1 月 9 日付け文第 2872 号・県教委通知により、事業用地内の遺構の分布状況を把握することを目的とした「確認調査」を実施する対応に決定した。その後、平成 25 年 2 月 1 日付で文化財保護法第 93 条に基づく発掘届出が提出（事業主→町教委→県教委）され（回答：平成 25 年 2 月 13 日文第 3233 号・県教委通知）、平成 25 年 2 月下旬から確認調査を実施することとなった。

(2) 確認調査

確認調査は、平成 25 年 2 月 18 日・19 日の 2 日間実施した。調査主体は町教委である。調査は、事業計画地区内にトレンチを 22 箇所（T-1～22）設定して行い、遺構の有無を確認した。その結果、トレンチ 1・2・11・12・13・14・16・17・20・21 において遺構が検出され、事業計画範囲のほぼ全面に遺構が残存していること、小平館跡の範囲がさらに東側に広がることが判明した（第 5・10 図）。なお、遺構確認面は、現地表面から約 0.3～1.0m 下で確認された粘土質シルト土の地山上面である。

今回の宅地造成事業は、事業計画地が西から東へ緩やかに傾斜する平坦地であったことから、まず事業計画地内の現地表面に 0.3m～1.2m の盛土工事を行ったのち、専用住宅 22 区画分の建物建築・私道造成等を行う工法であった。したがって、工事計画と確認調査の結果から、事業用地内の遺構については、盛土工事に伴う擁壁設置箇所・隣接する現道と給排水管接続箇所以外は、切土による遺構削平は行われなかったことが判明した。この結果を受け、宮城県発掘調査基準（平成 12 年 4 月 1 日）に基づき、事業主・県教委・町教委の三者で再度協議した結果、遺構が確認された宅地造成地内の私道部分について、本格的な調査（事前調査）を行うこととなった。

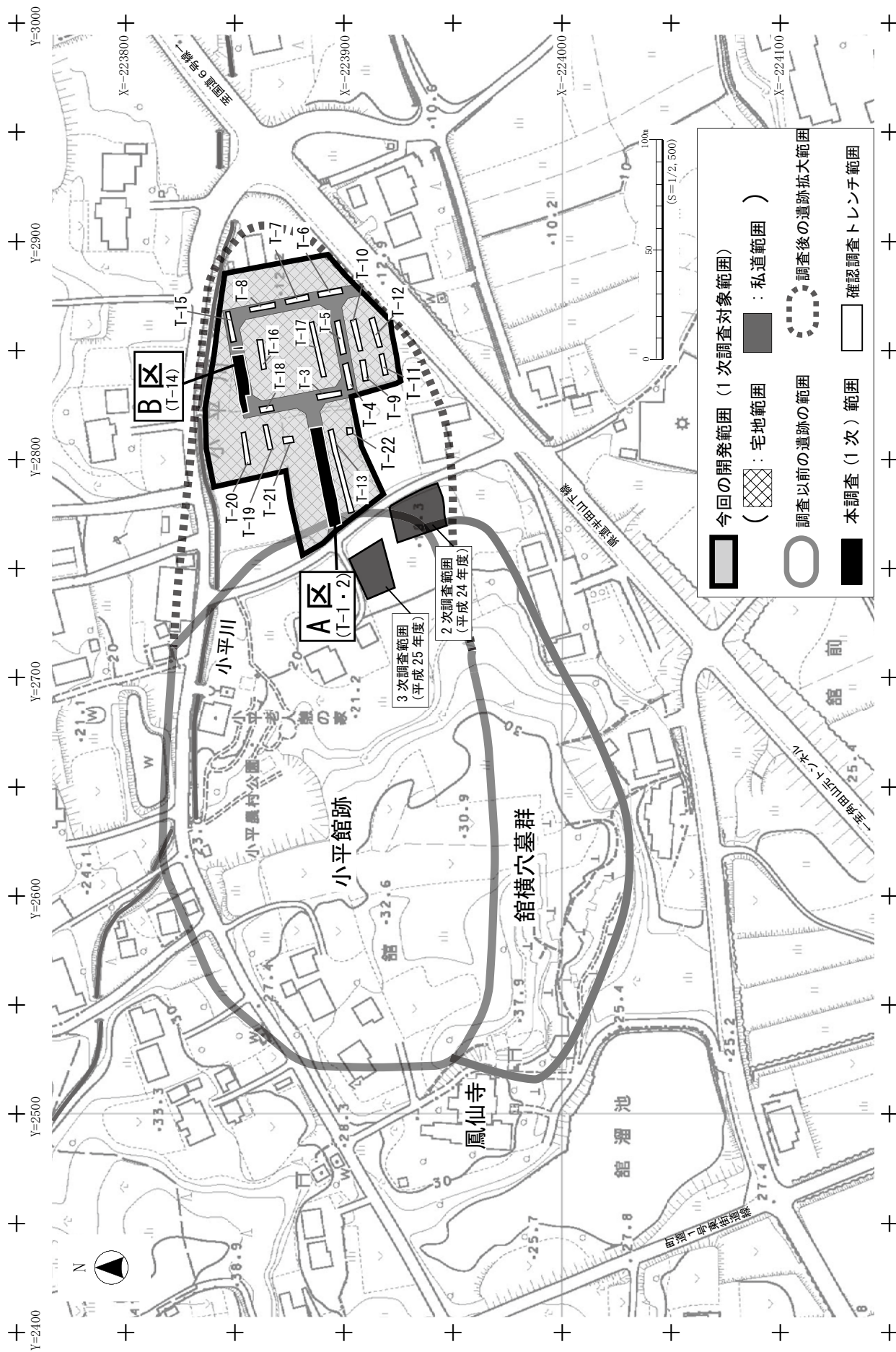
2. 小平館跡（1次調査）発掘調査の経過

(1) 事前調査（本発掘調査）の経過

小平館跡（1次調査）の事前調査は、町教委が主体となり実施した。

事前調査（本発掘調査）は、平成 25 年 2 月 21 日～平成 25 年 3 月 1 日の 7 日間実施した。事前調査の対象となったのは、宅地造成計画用地のうち、私道部分である（第 5・10 図）。

調査面積は、調査対象となった事業計画面積の約 8,120 m²のうち、私道部分で遺構が確認された約 425 m²（A 区・B 区）である。調査にあたっては、事業主と事前調査に係る調整等を行った結果、工事着手



第5図 小平館跡（1次調査）調査区的位置

予定時期と役場の予算措置の関係から、発掘調査費用の補正予算措置は行わず、そのすべてを事業主直接負担とし、人件費・物品・重機等の資材の提供を受け、調査を進めることとした。

調査は、平成 25 年 2 月 21 日から表土除去を開始し、同日から遺構の検出・精査に着手した。2 月 26 日には B 区、2 月 27 日には A 区の遺構精査・写真撮影がほぼ完了した。2 月 28 日には予備調査・断割調査・基本層序等の確認を行い、現地調査のすべてを完了した。その後、3 月 1 日に調査現場の埋め戻しを行い、現地を事業主に引き渡した。小平館跡の発掘調査体制は、調査員 2 名、調査補助員 2 名、作業員のべ 23 名である。

発掘調査完了後、平成 25 年 3 月 1 日に遺失物法に基づく「埋蔵物発見届」を亶理警察署に提出し、3 月 4 日には出土遺物の文化財認定に係る書類を県教委に提出した。また、今回の調査により、小平館跡の範囲が従来範囲よりもさらに東側に広がることが判明したことから、遺跡の範囲拡大の手続きも併せて行った。

(2) 整理・報告書作成作業の経過

小平館跡で出土した遺物、現地の記録類の整理・報告書作成作業は、発掘調査終了後、山元町役場敷地内に設置した整理室内で行った。なお、現地調査を実施した平成 24 年度以降、東日本大震災に伴う復興事業等に関連する町内の発掘調査件数が急増したこともあり、本格的な整理作業については、平成 26 年度から開始し、報告書の作成・執筆は平成 27 年度に実施した。

具体的な作業内容は以下のとおりである。

【平成 26 年度の作業内容】

- ・ 出土遺物の整理作業（洗浄・保存処理）
- ・ 記録写真のネーミング
- ・ 出土遺物の整理作業（接合・注記・復元）
- ・ 出土遺物の実測図・拓本の作成、実測図のトレース、出土遺物の写真撮影
- ・ 平面図、断面図の修正・トレース

【平成 27 年度の作業内容】

- ・ 平面図・写真類の版組み
- ・ 報告書執筆
- ・ 出土遺物、記録類の収納

第Ⅲ章 発掘調査

1. 基本層序

今回の調査区は、標高12～17mの段丘上の緩やかな平坦面に位置する。調査区西部の標高が最も高く、そこから東にかけて緩やかに傾斜する。調査区の発掘調査実施前の土地利用状況は、畑地・原野である。

調査区の基本層序は、調査地点によって若干の相違はあるが、原則として上から現代の表土・耕作土（Ⅰ層）、現代の盛土（Ⅱ層）、旧表土（Ⅲ層）、地山（Ⅳ層）の順で構成される。遺構確認面はⅣa～c層上面である。旧表土（Ⅲ層）は調査区のほぼ全域に分布している。遺構確認面である地山や遺構の残存状況から、今回の調査区については、一部で後世の削平を受けているが、基本的に本来の地形は残存しているものと考えられる。

それぞれの層の概要は以下のとおりである（第6図）。

Ⅰ層：現代の表土・耕作土。Ⅰa層（表土）とⅠb層（耕作土）に細別される。

- ・Ⅰa層：褐色（10YR4/4）シルト土。層厚は10cm前後である。調査区西側で確認された。
- ・Ⅰb層：暗褐色（10YR3/4）シルト土。層厚は20cm前後である。調査区東側で確認された。

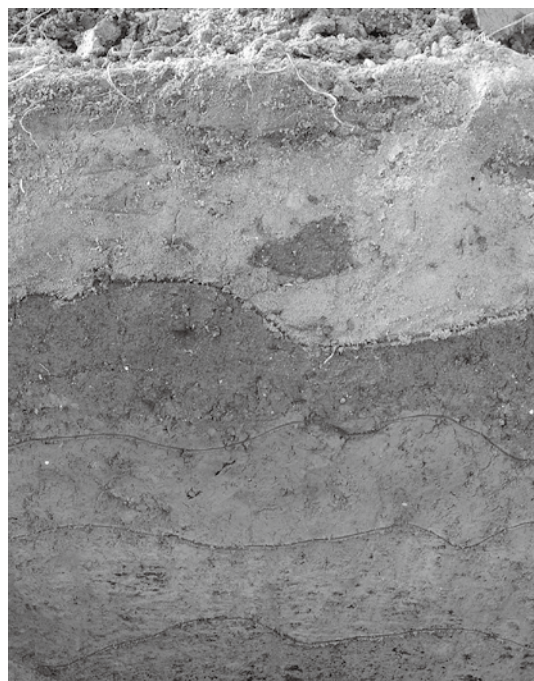
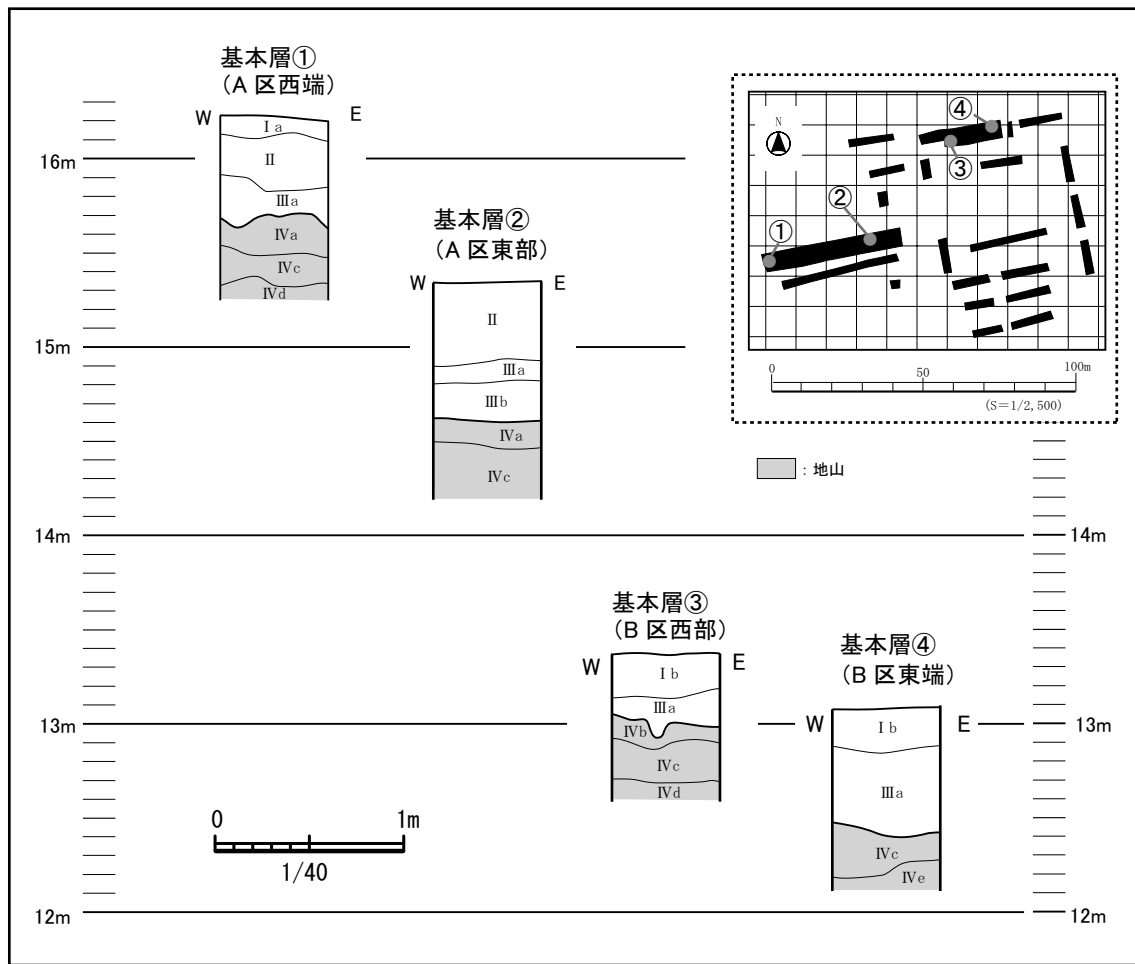
Ⅱ層：明黄褐色（2.5Y6/6）シルト土。調査区西側のみで認められた。層厚は20～40cm前後。地山起源の粒子を多く含む。現代の土地利用に伴う盛土である。

Ⅲ層：近世以降の遺物を含む層で、近世以降に形成された旧表土であると考えられる。調査区全域で認められ、調査区東側にいくにつれて厚く堆積していた。混入物・色調の差異から、Ⅲa・Ⅲb層に細別され、Ⅲb層→Ⅲa層の順に堆積していた。層厚10～40cm。

- ・Ⅲa層：暗褐色（10YR3/3）シルト土。焼土粒子・炭化物片を含む。
- ・Ⅲb層：褐色（10YR4/4）シルト土。焼土粒子・炭化物片・地山ブロック・小礫を含む。

Ⅳ層：地山。旧表土直下で確認された。各地点により異なる種類の地山が確認されたが、基本的にはⅣe層→Ⅳd層→Ⅳc層→Ⅳb層→Ⅳa層の順に堆積していると思われる。

- ・Ⅳa層：褐色（10YR4/6）粘土質シルト土による均一な層。
- ・Ⅳb層：黄褐色（10YR5/8）粘土質シルト土。小礫を少量含む。
- ・Ⅳc層：黄褐色（10YR5/8）粘土質シルト土。黄白色粘土、酸化鉄含む。
- ・Ⅳd層：黄褐色（10YR5/8）粘土質シルト土による均一な層。
- ・Ⅳe層：黄褐色（10YR5/8）粘土質シルト土。小礫を多く含む。



基本層① 北壁 (南から撮影)



基本層② 北壁 (南から撮影)

第6図 小平館跡 (1次調査) A区・B区 基本層序

2. 発掘調査の方法

今回の調査は、小平地区宅地造成工事に伴う発掘調査であり、本遺跡の現地調査・整理作業は下記の方法により行った。

(1) 現地調査

【表土除去・遺構精査】

表土除去作業はバックホー (0.45 m³)、遺構検出以降の作業は人力により行った。なお、遺構検出作業については、基本層IVa・b層上面で行った。

【遺構測量】

検出した遺構や調査区の図面作成については、遺構平面図・等高線作成はトータルステーション (SRX5X) 及び電子平板システム (遺構くん cubic 2011 7.02)、遺構断面図は手実測により縮尺 1/20 で実測した。その際、調査対象範囲に設置した国家座標系に基づく基準杭を利用した。測量基準杭の国家座標は例言に示したとおりである。

【遺構番号】

遺構番号は、現地調査の段階で、遺構ごとの性格を確認した上で、それぞれの遺構ごとに通し番号 (P1～、SK1～、SD1～) を振り、各種記録類を作成した。なお、遺構の性格ごとの略記号については例言に示したとおりである。

【遺構の記録作成】

今回の調査で検出した遺構は、原則として、すべての記録作成 (平面図・断面図・写真撮影) を行った。このうち、中世以降と判断される柱穴・ピット類は、調査を円滑に進めるため、遺構平面の下場計測を省略した。また、今回の調査で掘り込みを行った遺構の底面標高はすべて記録した。

【遺物の記録・取り上げ】

遺構から出土した遺物のうち、出土状況の平面記録の対象としたものは、遺構に伴う遺物でかつ残存状況のよいもののみとした。遺物の取り上げについては、原則として遺構出土遺物は出土層位ごと、遺構外出土遺物は検出面等として記録し取り上げた。ただし、遺構出土の遺物のうち、半裁時 (分層前) に出土した遺物で出土層位が明確でないものは、「堆積土」として取り上げた。

【写真撮影】

記録写真には、一眼レフデジタルカメラ (NikonD90/レンズ AF-S NIKKOR 18-200mm/画質モード RAW +FINE) を使用した。

(2) 室内整理

① 遺物の整理作業

【遺物洗浄・接合・復元】

遺物の洗浄は、水洗により作業を行い、比較的脆い遺物 (土師器) については、土器強化剤 (使用薬剤: バインダー17) による処理を施した。遺物の接合は、まず同一遺構内の出土遺物の接合を行い、その後、別々の遺構間、その他 (検出面・排土など) から出土した遺物の接合を行った。遺物の復元は、実測図作成が可能なものを対象として作業を行った。

【注記作業】

遺物の注記は、ジェットマーカー (第一合成株式会社) を一定期間リースし、機械による注記を行っ

た。遺物への注記内容は、原則として遺跡名の略号・調査年・出土遺構・出土層位とし、遺物の内面等に注記した。なお、注記した出土遺構名は、現場調査で付した番号とした。

【遺物抽出・実測図・拓本図作成】

遺物の抽出・実測図作成は調査員が行い、拓本作成は整理作業員、報告書用の拓本図作成は調査補助員が担当した。

遺物抽出に際しては、原則として遺構に伴う遺物を中心に抽出し、遺構に伴わないものや遺構外出土のものについても図化が可能なものは抽出の対象とした。

遺物の実測図については、原則として手実測により作成した。

拓本図の作成は、墨拓と画仙紙を使用し拓本を作成した後、スキャナーで PC に画像を取り込み、報告書掲載用に加工した。

【実測図トレース、写真撮影】

遺物の実測図のトレース図は、素図をスキャナーで取り込み、PC 上でのデジタルトレースを行い作成した。報告書に掲載する遺物の写真撮影・写真加工作業は、民間機関（株式会社アートプロフィール）に委託した。

②図面の整理・報告書作成

遺構図の整理作業は、平面図修正、断面図修正・トレース、土層注記等のデータ入力を行ったのち、図版作成、図面収納の手順で行った。報告書の執筆は、調査員が担当した。

なお、遺物・断面図のトレース図作成、写真画像処理、遺構図等の図版作成、報告書版組みについては、遺構くん cubic 2012 8. 03、Adobe Illustrator CS5、Adobe Photoshop CS5・6、Adobe InDesign CS5・6、表データ・報告書原稿の作成については Microsoft Office Word・Excel のソフトウェアを使用した。

3. 発見された遺構と遺物

今回の調査では、掘立柱建物跡 3 棟、溝跡 1 条、土坑 12 基、ピット 66 個を検出した(第 7～11 図)。出土遺物は、土師器、須恵器、石器である。以下、遺構ごとに記述する。



小平館跡（1次調査）作業風景



小平館跡（1次調査）A区 完掘状況（西から撮影）



小平館跡（1次調査）A区 完掘状況（東から撮影）

第7図 小平館跡（1次調査）A区 調査区全景



小平館跡（1次調査）B区 完掘状況（西から撮影）



小平館跡（1次調査）B区 完掘状況（東から撮影）

第8図 小平館跡（1次調査）B区 調査区全景



小平館跡（1次調査）T-16
遺構検出状況（東から撮影）



小平館跡（1次調査）T-20
遺構検出状況（東から撮影）



小平館跡（1次調査）T-17
遺構検出状況（西から撮影）



小平館跡（1次調査）T-13 遺構検出状況（東から撮影）

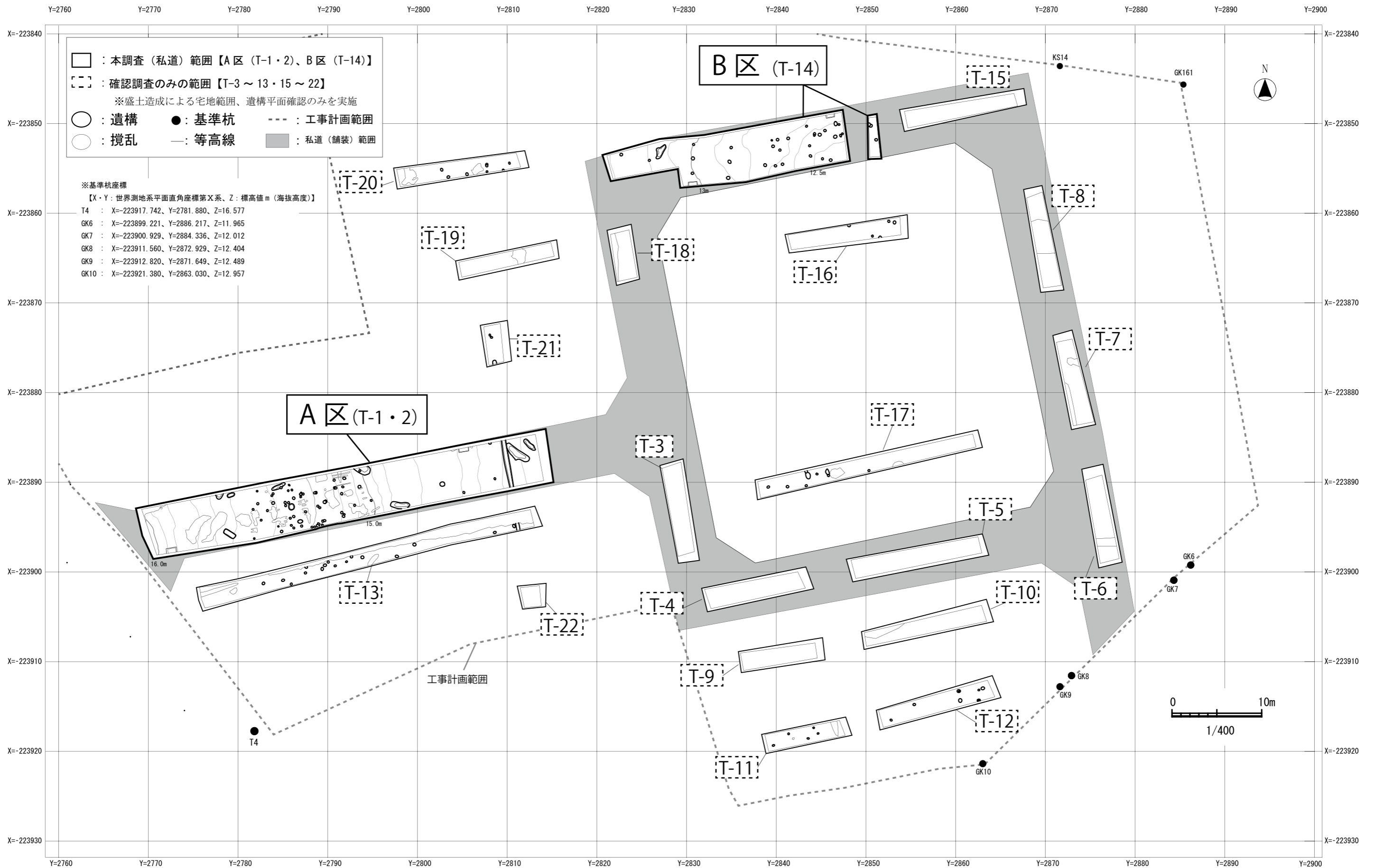


小平館跡（1次調査）T-11
遺構検出状況（西から撮影）

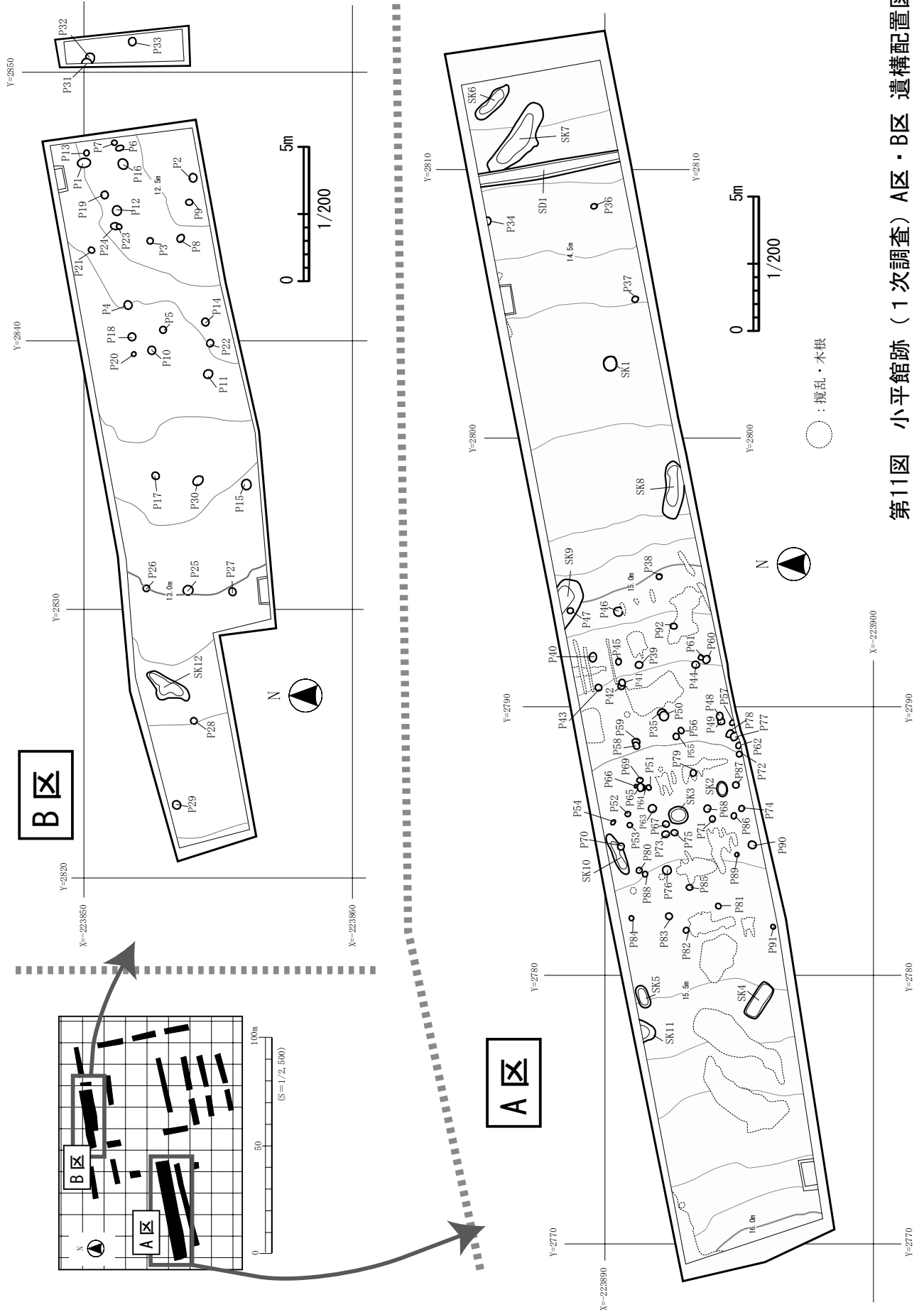


小平館跡（1次調査）T-12
遺構検出状況（西から撮影）

第9図 小平館跡（1次調査）確認調査トレンチ（T-11～13・16・17・20）全景



第10図 小平館跡(1次調査)調査区全体図



第11図 小平館跡（1次調査）A区・B区 遺構配置図

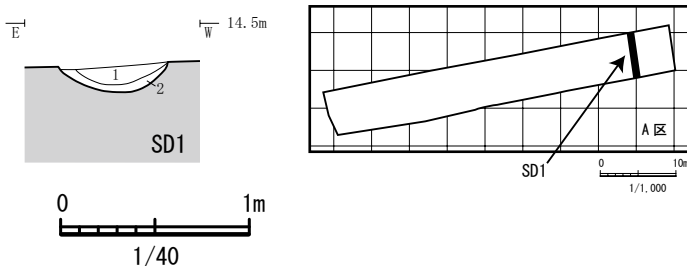
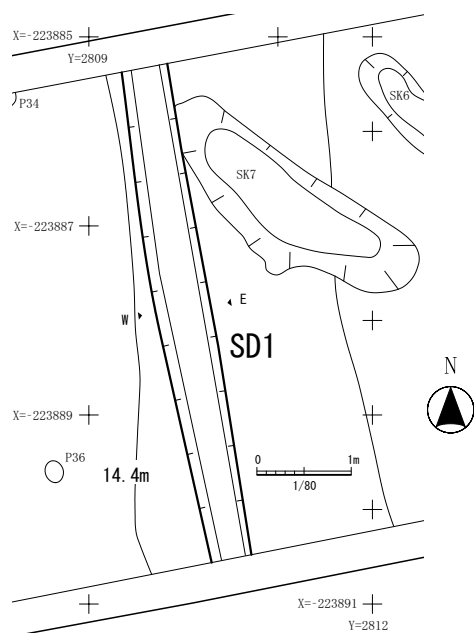
(1) 溝跡

A区東側で1条検出した。

【SD1 溝跡】(第12図)

A区東側の標高14.4mの平坦面に立地する。確認面はIVa層である。SK7土坑と重複し、これより新しい。南北方向に延びる溝で、溝の北部・南部は調査区外へ続いている。検出長は約5.2mで、上幅50~56cm、下幅20~30cm、深さ10~13cmである。底面の標高は溝の南部が高く、北部が低い。溝の短軸方向の断面形はU字形で、堆積土は2層に分かれいずれも自然堆積である。遺物は1層からロクロ成形の土師器片7点(内黒4点・赤焼3点、25g)・甕片1点(5g)が出土した。

溝跡は、A区東側以外にも確認調査時のT13・21においても確認されており(第10図)、少なくとも南北19m程度の溝跡であると考えられる。



層	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロック少量、焼土粒子微量含む。
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山粒子少量含む。



SD1 溝跡 断面(北から)



SD1 溝跡 完掘状況(北から)

第12図 SD1 溝跡

(2) 土坑

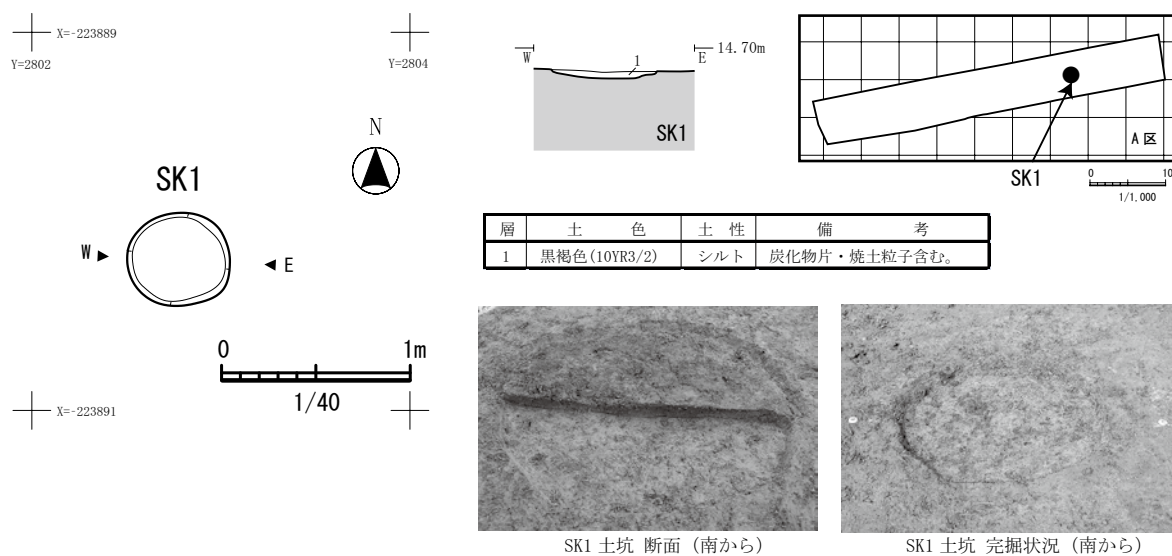
土坑はA区で11基(SK1~11)、B区1基(SK12)、合計12基検出した。それぞれの特徴等については第2表にまとめた。

第2表 小平館跡(1次調査) 土坑 属性表

遺構No.	平面形	規模(m)	深さ(cm)	断面形	堆積土	出土遺物	備考
SK 1	円形	0.56×0.48	3	皿状	自然堆積	—	
SK 2	楕円形	0.56×0.40	4	皿状	自然堆積	土師器	
SK 3	円形	0.69×0.62	18	U字形	自然堆積	—	
SK 4	隅丸長方形	1.40×0.60	30	逆台形	人為堆積	—	
SK 5	楕円形	0.84×0.44	26	U字形	人為堆積	—	
SK 6	隅丸長方形	1.69×0.48	14	皿状	自然堆積	—	平面形やや不整形。
SK 7	隅丸長方形	3.01×1.04	54	皿状	自然堆積	—	平面形やや不整形。SD1より古い。
SK 8	隅丸長方形	2.11×0.66	26	皿状	自然堆積	—	平面形やや不整形。土坑南東部調査区外へ延びる。
SK 9	隅丸長方形?	(1.15)×1.05	22	皿状	自然堆積	—	P47より古い。土坑北側調査区外へ延びる。
SK 10	長楕円形	1.62×0.43	13	皿状	人為堆積	—	SB3・P70より古い。
SK 11	—	0.94×(0.58)	40	不整形	自然堆積	—	土坑北側調査区外へ延びる。
SK 12	不整形	1.60×0.42~0.83	10	皿状	自然堆積	—	

【SK1土坑】(第13図・第2表)

A区東側の標高14.6~14.7mの平坦面に立地する。確認面はIVa層である。平面形は長軸0.56m、短軸0.48mの東西方向に長軸をもつ円形を呈し、深さは3cmである。長軸方向の断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。堆積土は1層で、焼土粒子・炭化物片を含む自然堆積層である。遺物は出土していない。



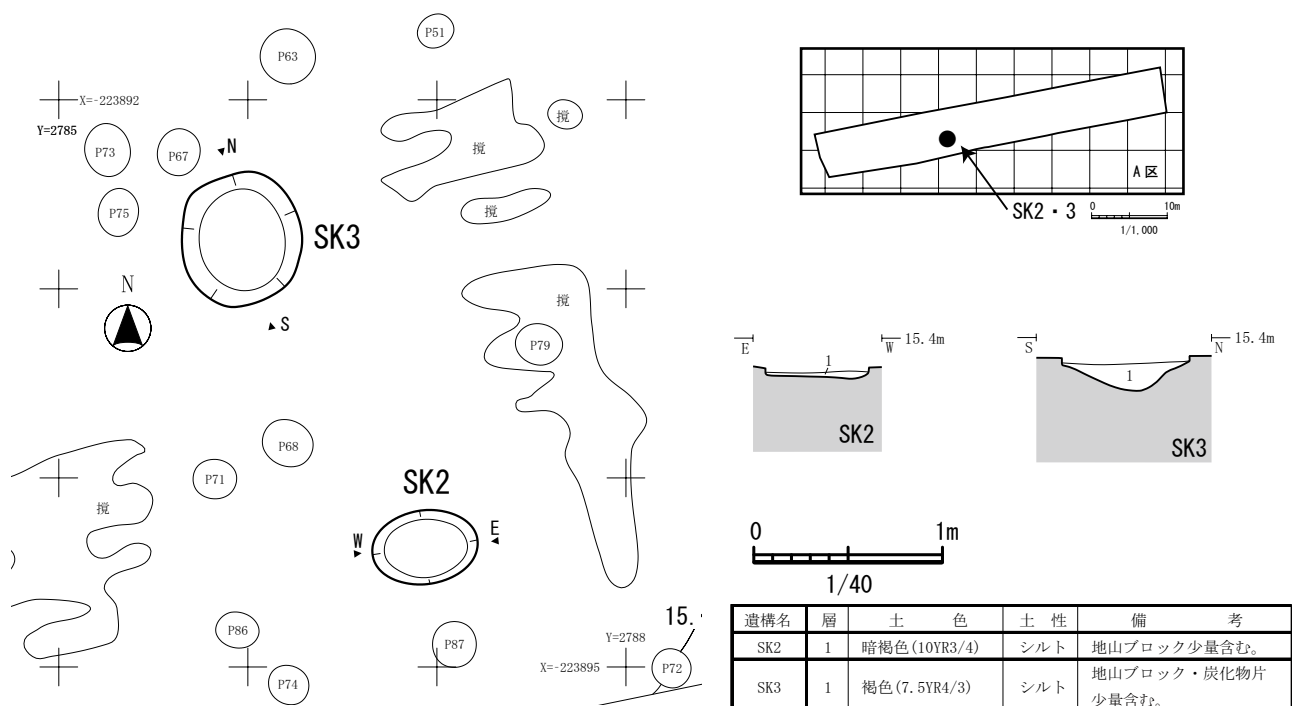
第13図 SK1 土坑

【SK2土坑】(第14・34図・第2表)

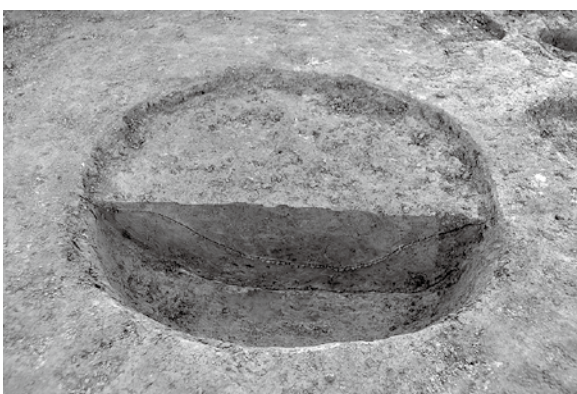
A区中央の標高15.4mの平坦面に立地する。確認面はIVa層である。平面形は長軸0.56m、短軸0.40mの東西方向に長軸をもつ楕円形を呈し、深さは4cmである。長軸方向の断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。堆積土は1層で、自然堆積である。遺物は1層から土師器坏(赤焼土器)破片3点(10g)、高台付坏破片(第34図2)1点(10g)出土した。

【SK3土坑】(第14図・第2表)

A区中央の標高15.4mの平坦面に立地する。確認面はIVa層である。平面形は長軸0.69m、短軸0.62mの南北方向に長軸をもつ円形を呈し、深さは18cmである。長軸方向の断面形はU字形である。堆積土は1層で、自然堆積である。遺物は出土していない。



SK2 土坑 断面 (北から)

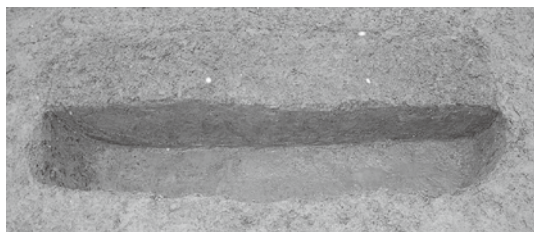
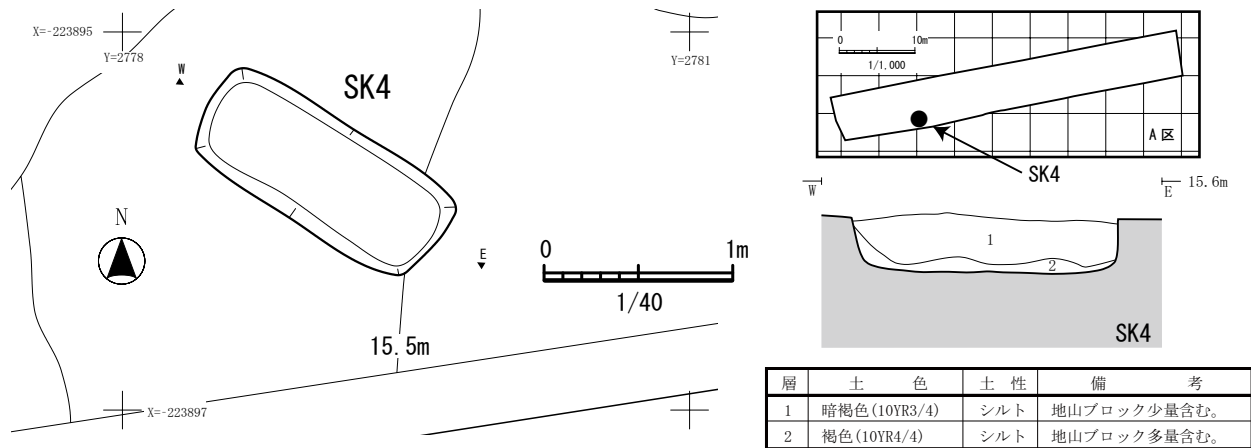


SK3 土坑 断面 (東から)

第14図 SK2・3 土坑

【SK4土坑】(第15図・第2表)

A区西側の標高15.5mの平坦面に立地する。確認面はIVa層である。平面形は長軸1.40m、短軸0.60mの東西方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈し、深さは30cmである。長軸方向の断面形は逆台形である。底面はほぼ平坦である。堆積土は2層に分かれ、いずれも地山ブロックを含む人為堆積層である。遺物は出土していない。



SK4土坑 断面(南西から)

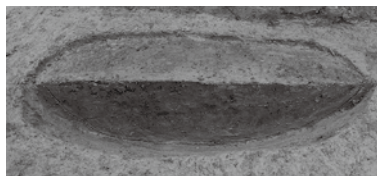
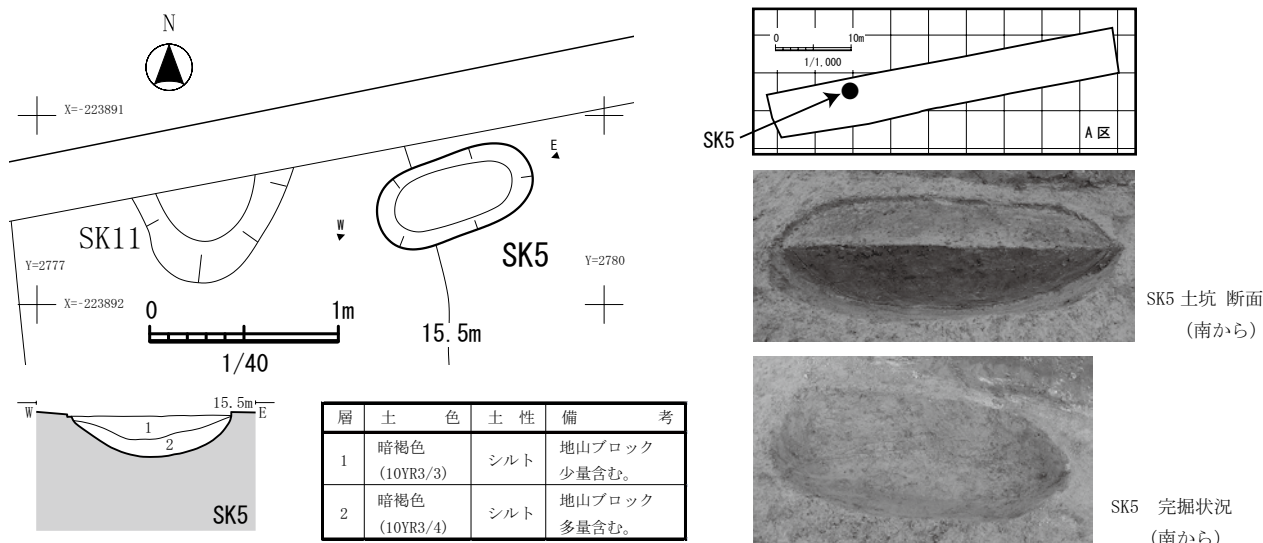


SK4土坑 完掘状況(南西から)

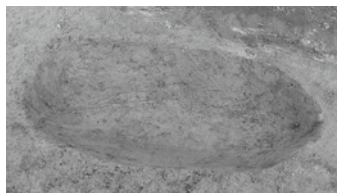
第15図 SK4 土坑

【SK5土坑】(第16図・第2表)

A区西側の標高15.5mの平坦面に立地する。確認面はIVa層である。平面形は長軸0.84m、短軸0.44mの東西方向に長軸をもつ楕円形を呈し、深さは26cmである。長軸方向の断面形はU字形である。堆積土は2層に分かれ、いずれも地山ブロックを含む人為堆積層である。遺物は出土していない。



SK5土坑 断面(南から)



SK5 完掘状況(南から)

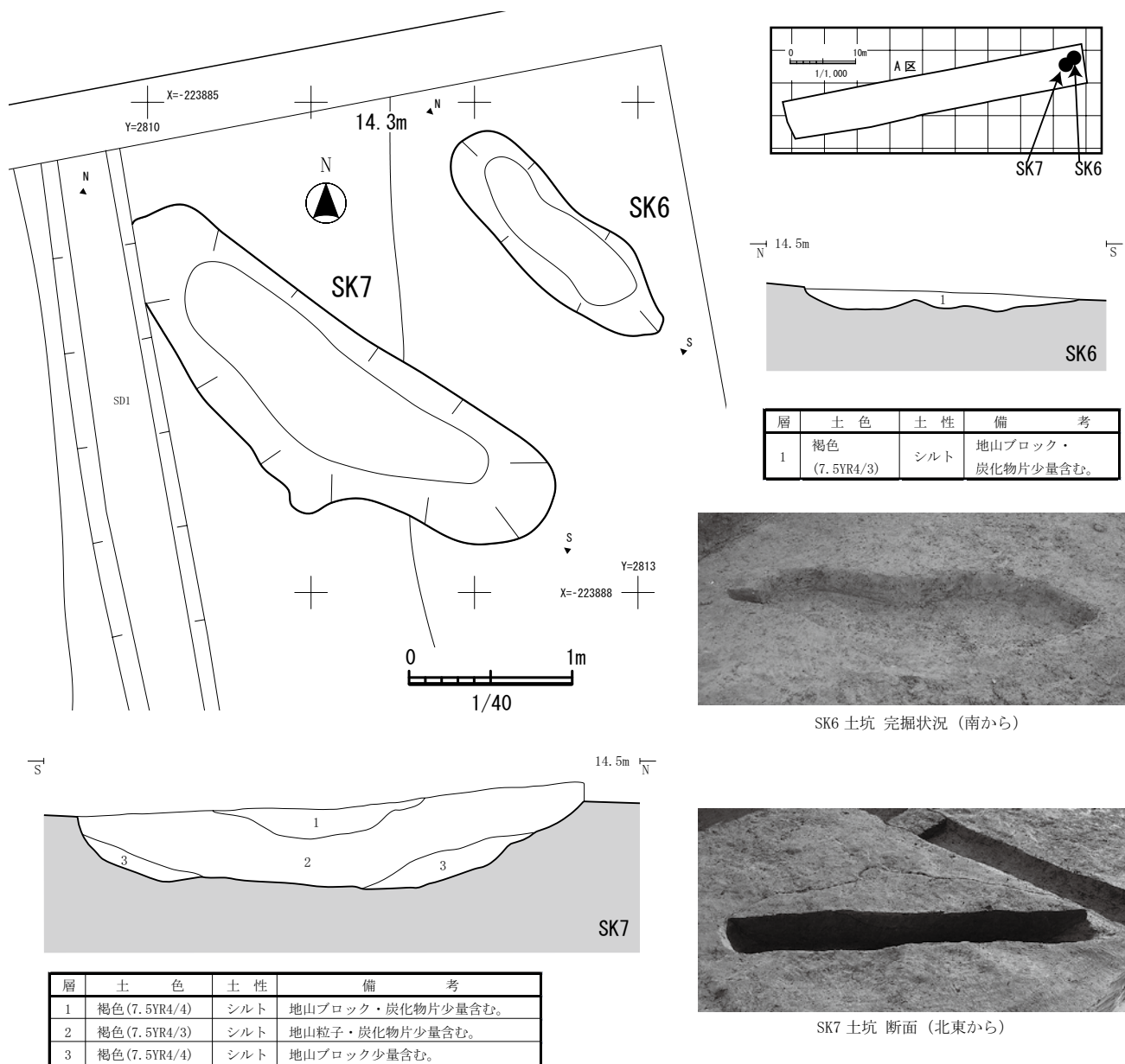
第16図 SK5 土坑

【SK6土坑】(第17図・第2表)

A区東端の標高14.3mの平坦面に立地する。確認面はIVa層である。平面形は長軸1.69m、短軸0.48mの東西方向に長軸をもつやや不整形な隅丸長方形を呈し、深さは14cmである。長軸方向の断面形は皿状で、底面には凹凸がある。堆積土は1層で、自然堆積である。遺物は出土していない。

【SK7土坑】(第17図・第2表)

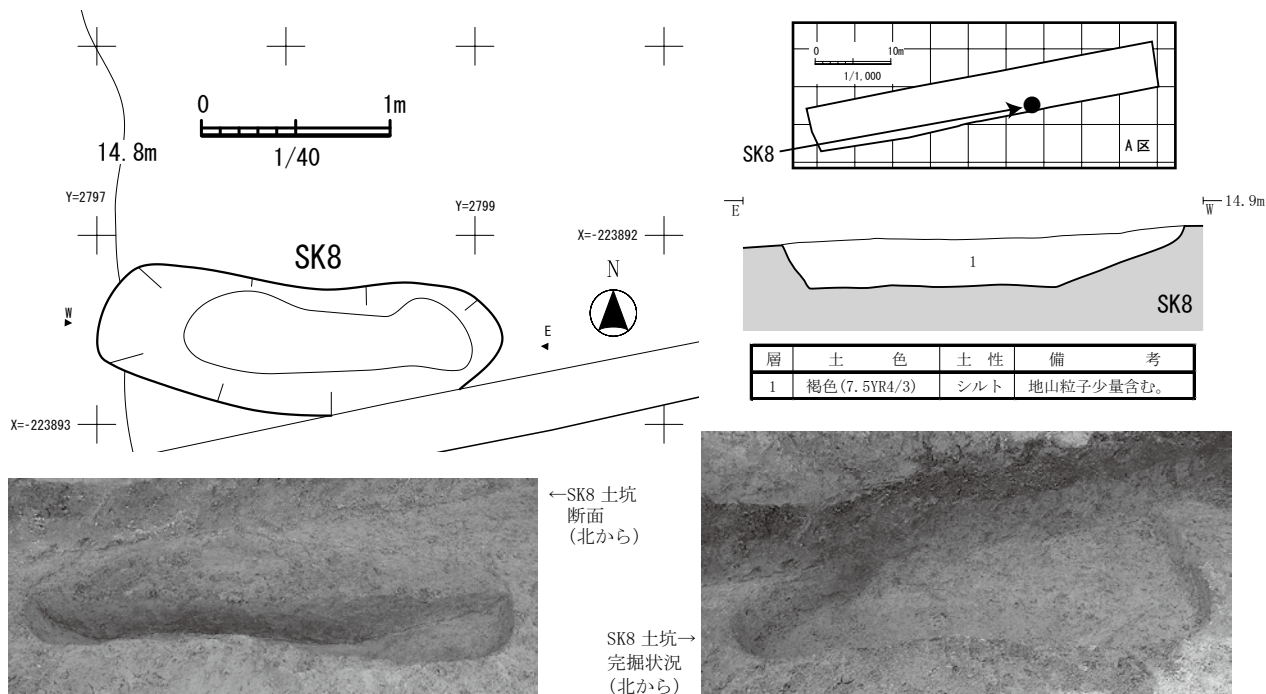
A区東端の標高14.3mの平坦面に立地する。確認面はIVa層である。SD1溝跡と重複し、これより古い。平面形は長軸3.01m、短軸1.04mの東西方向に長軸をもつやや不整形な隅丸長方形を呈し、深さは54cmである。長軸方向の断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。堆積土は3層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。



第17図 SK6・7 土坑

【SK8土坑】(第18図・第2表)

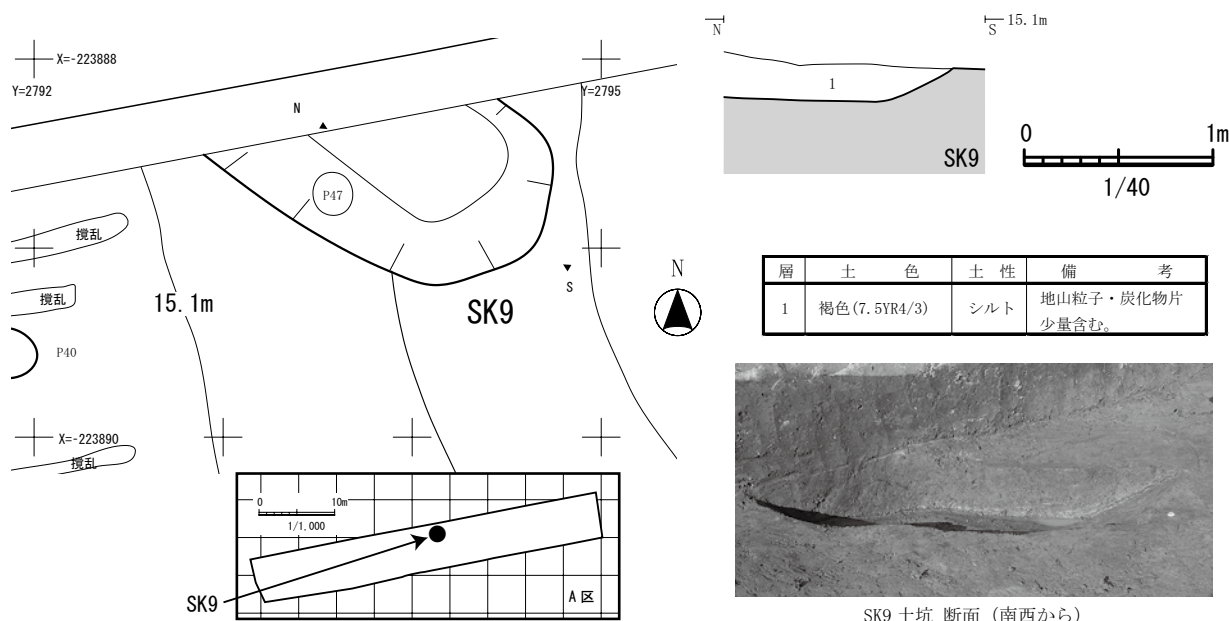
A区西端の標高14.8mの平坦面に立地する。確認面はIVa層である。土坑南東部の一部は調査区外へ延びる。平面形は長軸2.11m、短軸0.66mの東西方向に長軸をもつやや不整形な隅丸長方形を呈し、深さは26cmである。長軸方向の断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。堆積土は1層で、自然堆積である。遺物は出土していない。



第18図 SK8 土坑

【SK9土坑】(第19図・第2表)

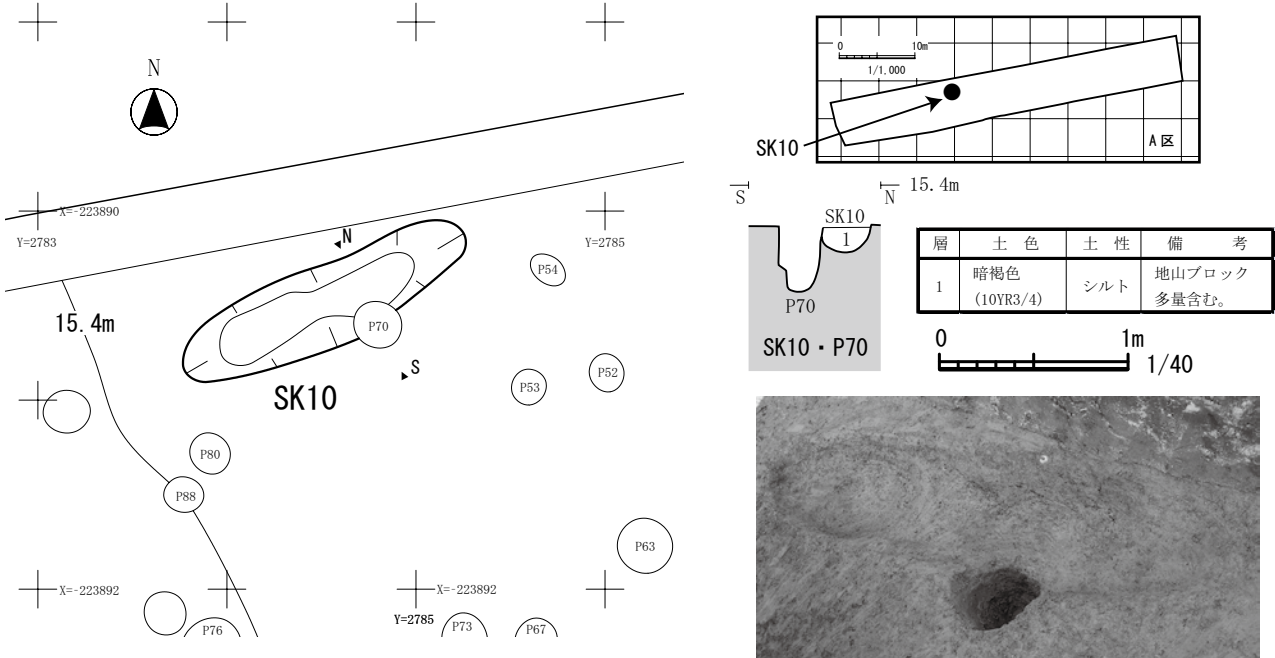
A区中央の標高15.0mの平坦面に立地する。確認面はIVa層である。P47と重複し、これより古い。土坑北側は調査区外へ延びる。平面形は長軸1.15m以上、短軸1.05mの東西方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈すると思われる。深さは22cmである。長軸方向の断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。堆積土は1層で、自然堆積である。遺物は出土していない。



第19図 SK9 土坑

【SK10土坑】(第20図・第2表)

A区中央やや西側の標高15.4mの平坦面に立地する。確認面はIVa層である。SB3・P70と重複し、これより古い。平面形は長軸1.62m、短軸0.43mの東西方向に長軸をもつ長楕円形を呈し、深さは13cmである。長軸方向の断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。堆積土は1層で、人為堆積である。遺物は出土していない。

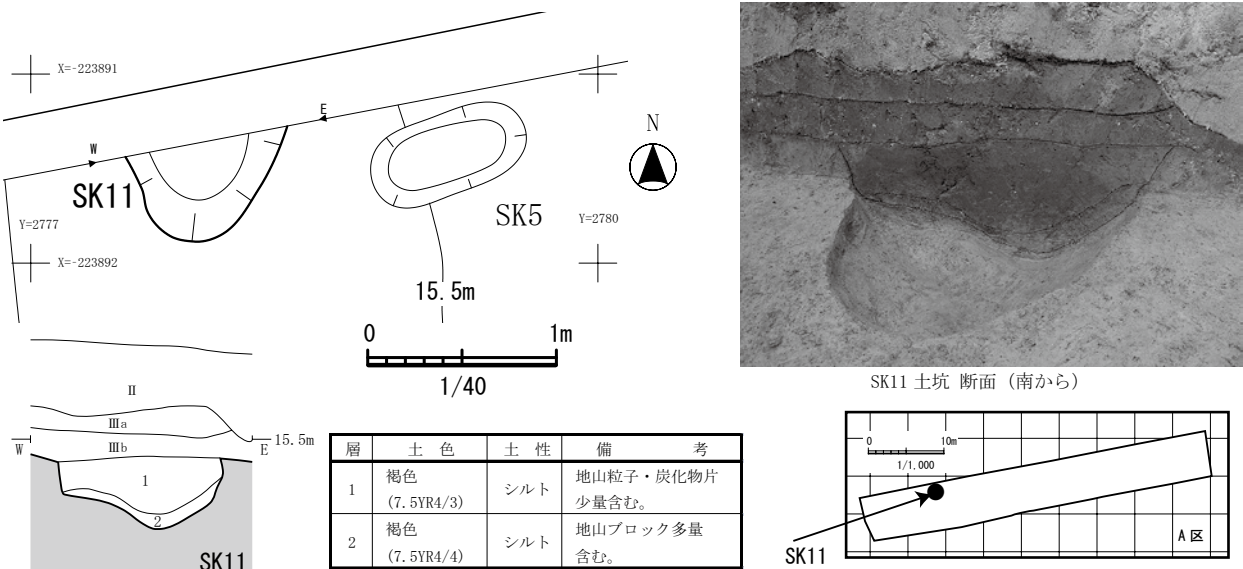


第20図 SK10 土坑

SK10土坑 完掘状況(南から)

【SK11土坑】(第21図・第2表)

A区西側の標高15.5mの平坦面に立地する。確認面はIVa層である。土坑北側は調査区外へ延びる。平面形は東西0.94m、南北0.58m以上、深さは40cmである。東西方向の断面形は不整形で、底面には凹みがある。堆積土は2層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。

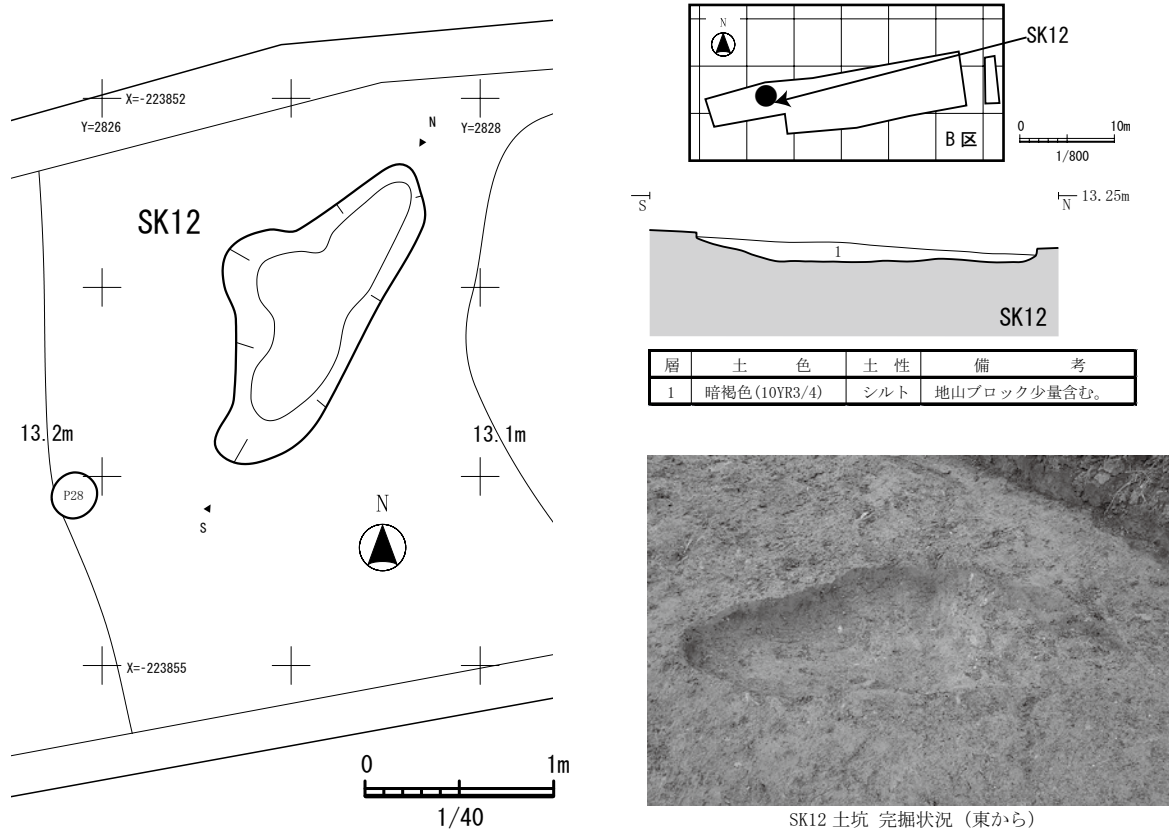


第21図 SK11 土坑

SK11土坑 断面(南から)

【SK12 土坑】 (第 22 図・第 2 表)

B 区西側の標高 13.1m の平坦面に立地する。確認面はIVb 層である。平面形は長軸 1.60m、短軸 0.42～0.83m の南北方向に長軸をもつ不整形を呈し、深さは 10cm である。長軸方向の断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。堆積土は 1 層で、自然堆積である。遺物は出土していない。



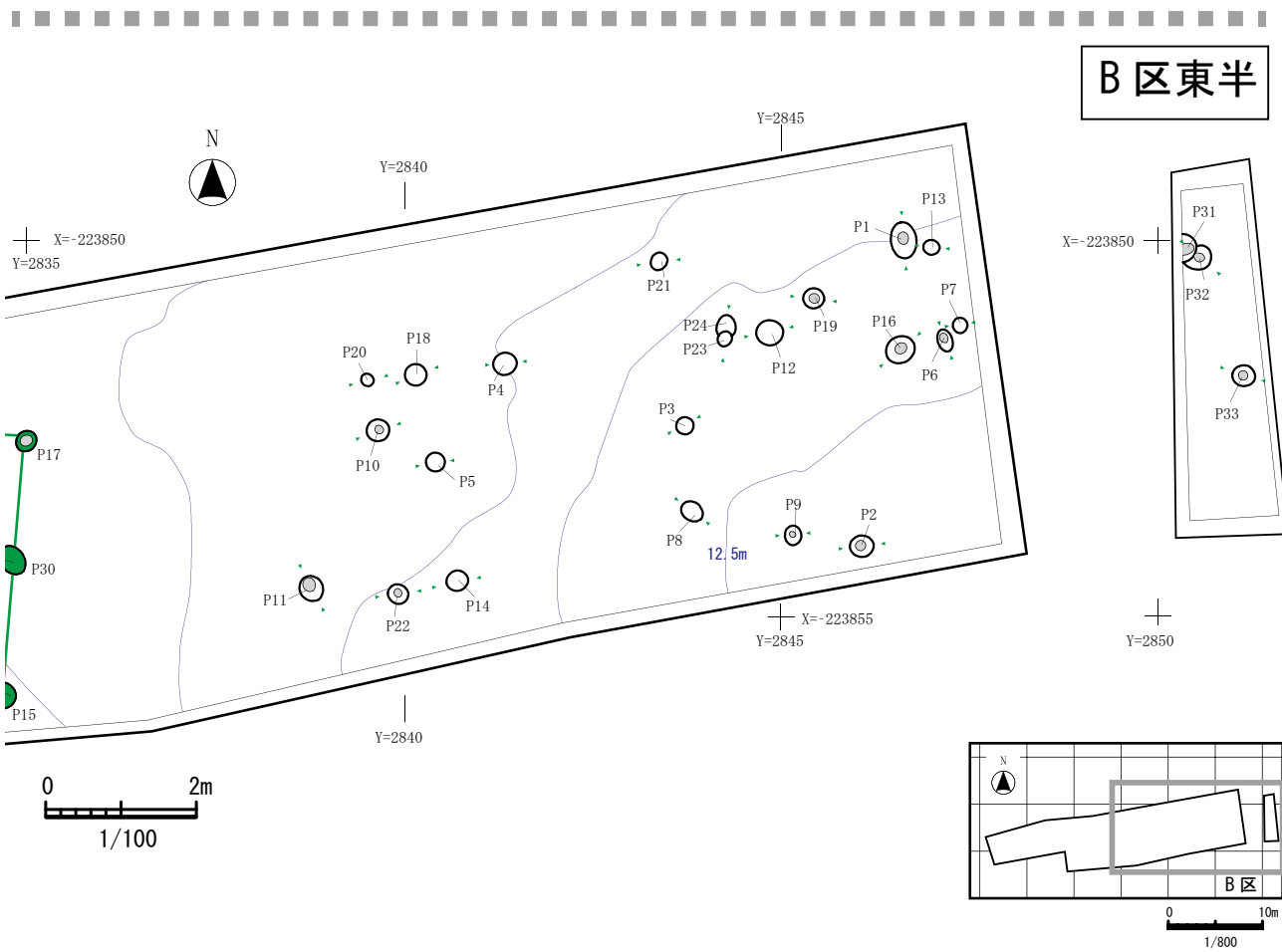
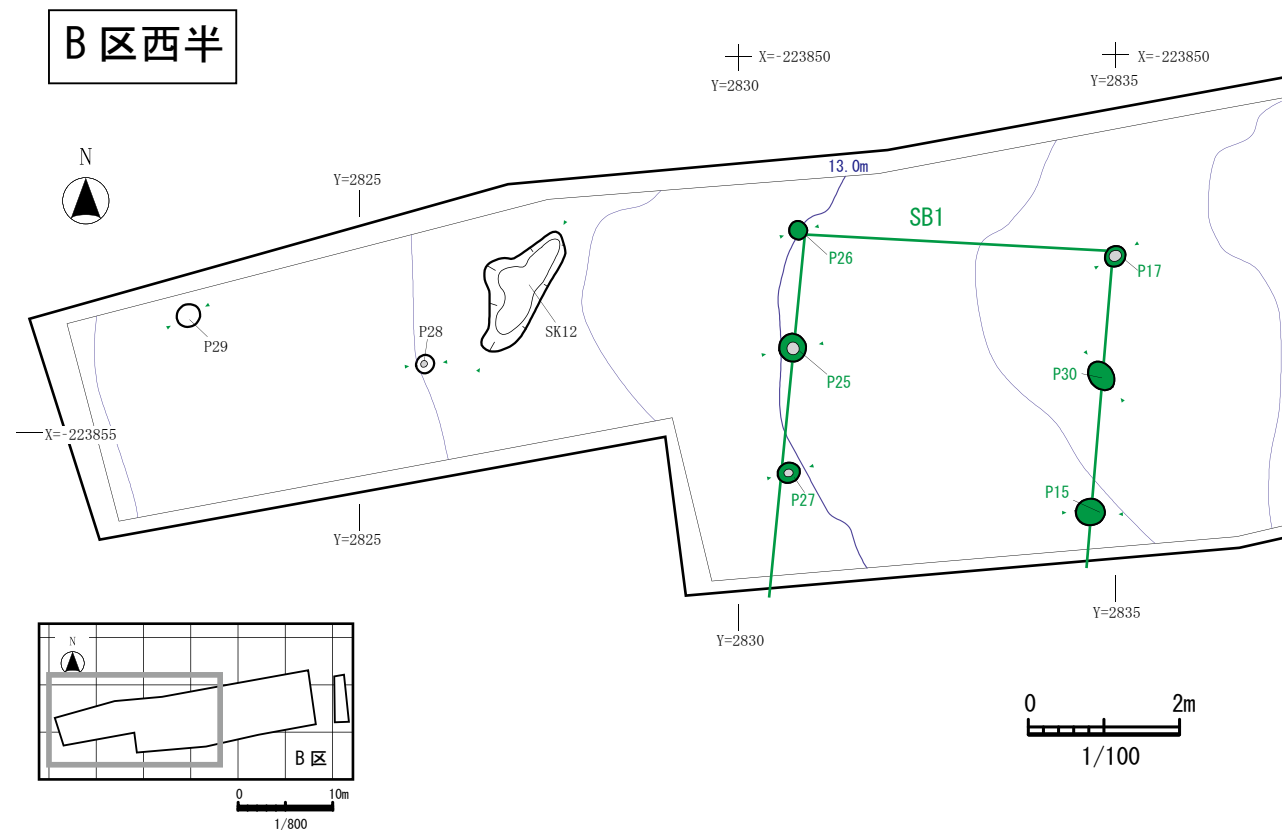
第22図 SK12 土坑

(3)ピット・掘立柱建物跡 (第 23～33 図・第 3～5 表)

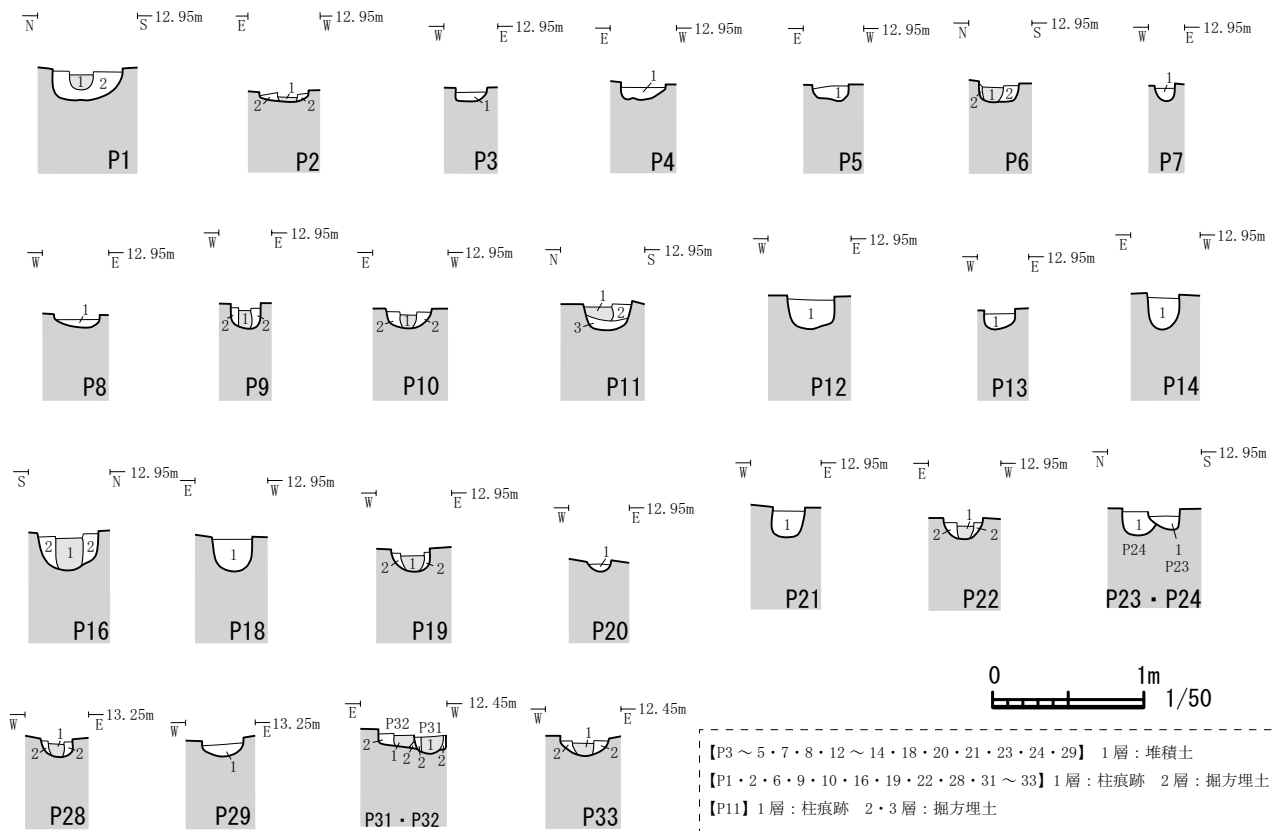
①ピットの特徴と出土遺物

ピットは、92 個検出した(第 23～29 図)。確認面は A 区ではIVa 層、B 区ではIVb・c 層である。それぞれの規模、柱痕跡の有無、堆積土・埋土、重複関係等の特徴については、第 3～5 表にまとめた。ピットは、長軸 13～45cm、短軸 12～35cm の円形・楕円形を呈し、深さは 4～50cm である。検出した 92 個のうち、48 個で直径 8～23cm の円形・楕円形の柱痕跡を確認した。これらのピットの埋土・堆積土は黒褐色・暗褐色シルト土を主体とし、A 区中央部付近・B 区のほぼ全域に分布する。また、確認調査時の T-11～13・16・17・20・21 でも確認した (第 10 図)。

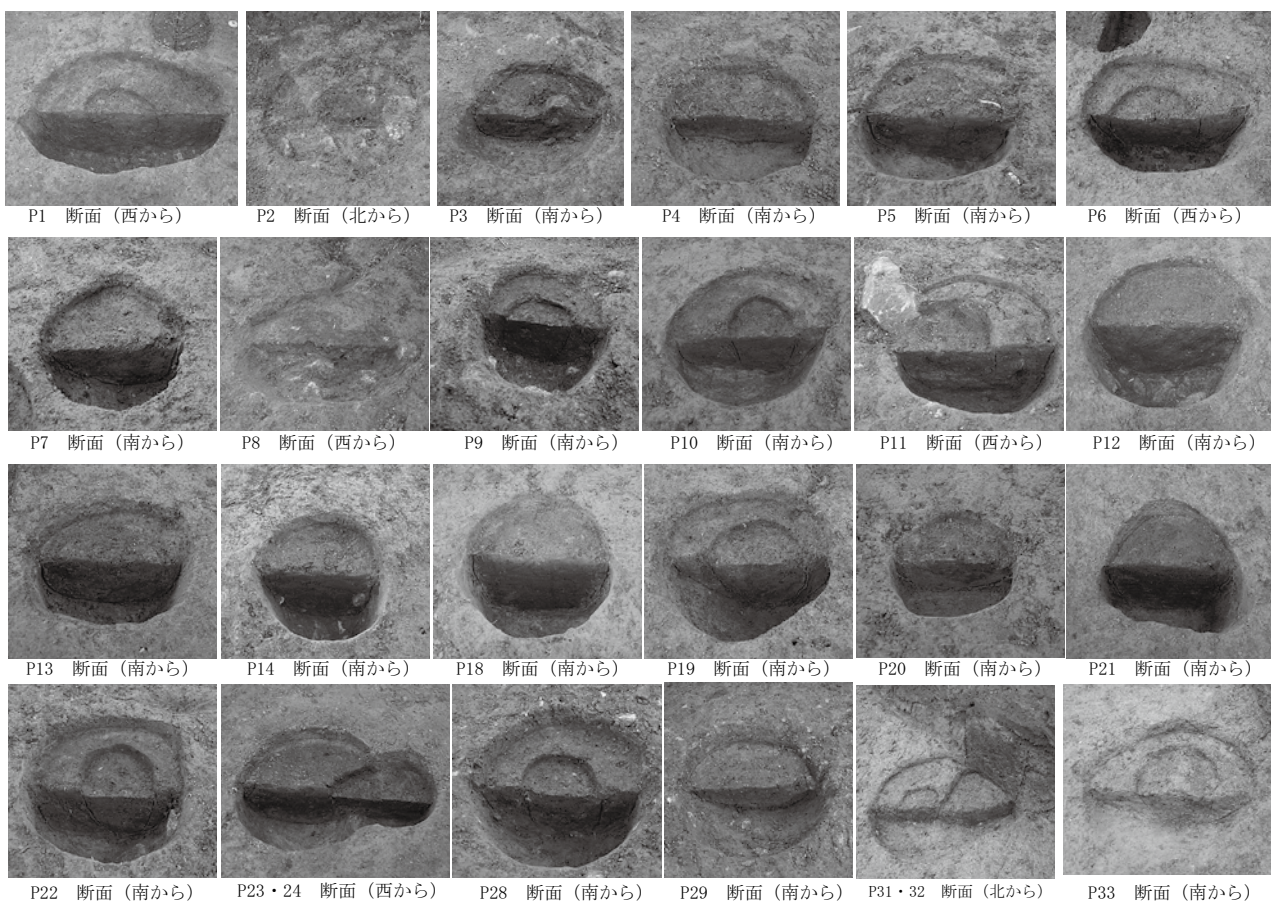
遺物は、P1 柱痕跡・掘方埋土からロクロ成形の土師器坏片 3 点 (5g)・甕片 4 点 (10g)、須恵器壺片 1 点 (5g)、P14 堆積土からロクロ成形の土師器甕片 1 点 (5g)、P24 堆積土から内黒処理を施したロクロ成形の土師器坏片 1 点 (5g) (第 34 図 1) 出土した (第 3 表)。



第23図 小平館跡（1次調査）B区 遺構配置図



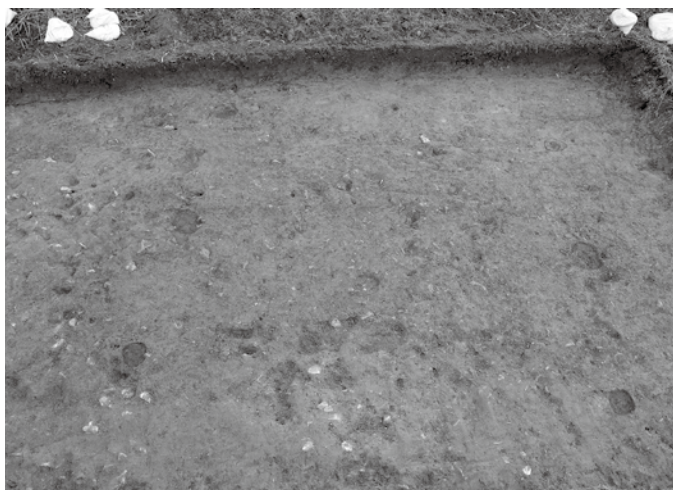
柱穴・ピット断面図（掘立柱建物跡以外）



第24図 小平館跡（1次調査）B区 柱穴・ピット断面



小平館跡（1次調査）B区西側
柱穴・ピット検出状況（西から）

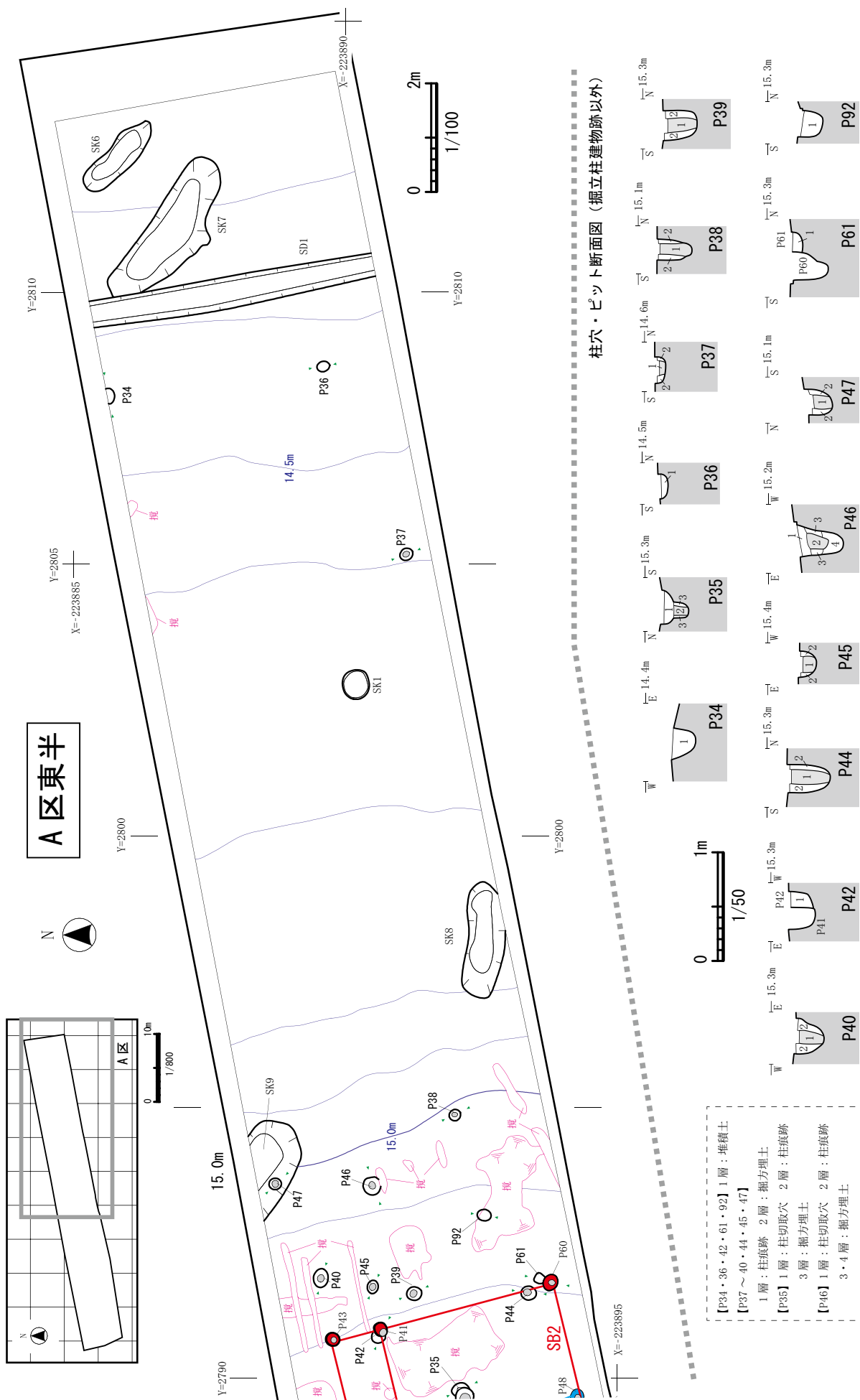


小平館跡（1次調査）B区中央
柱穴・ピット検出状況（北から）



小平館跡（1次調査）B区東半 柱穴・ピット検出状況（北から）

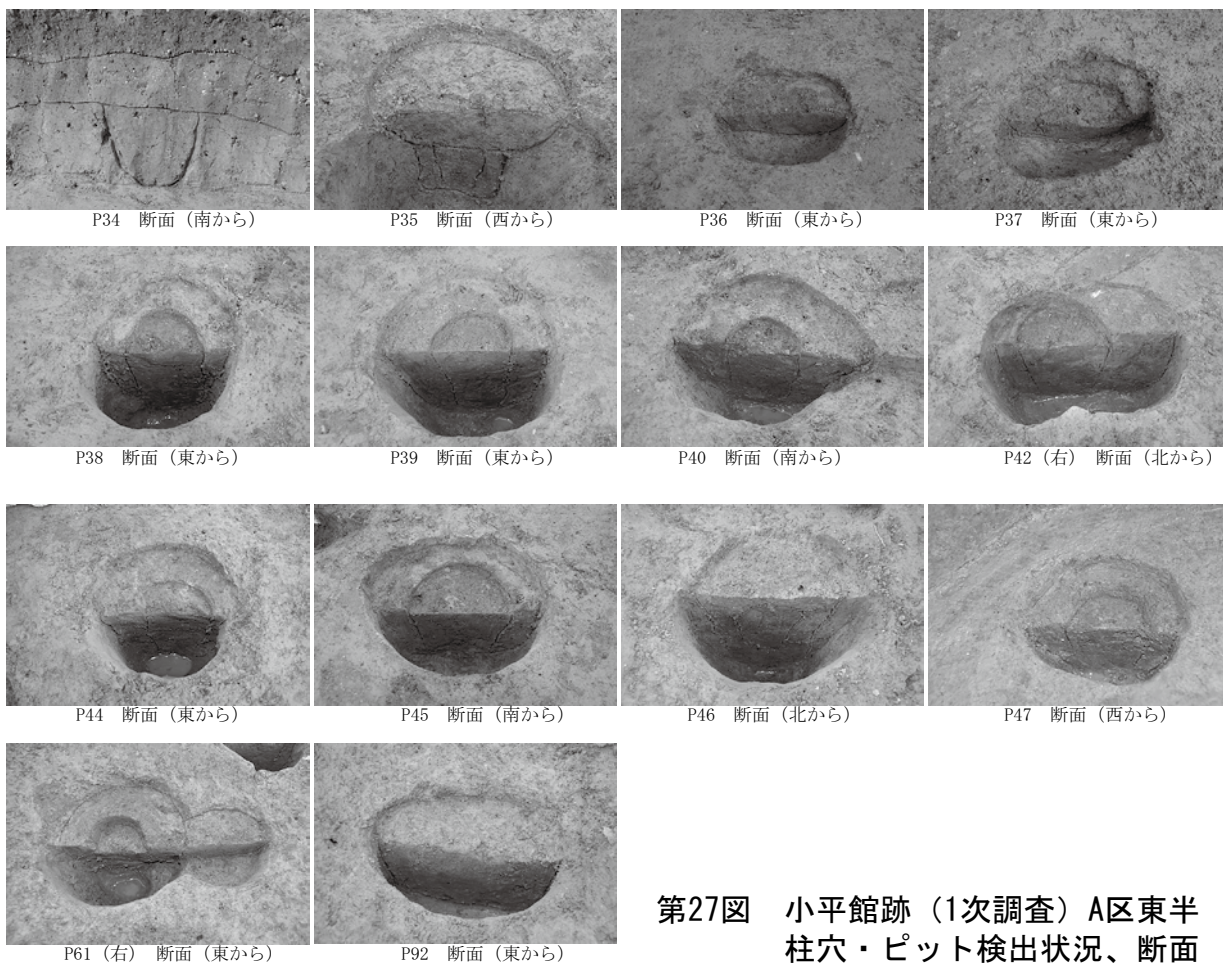
第25図 小平館跡（1次調査）B区 柱穴・ピット検出状況



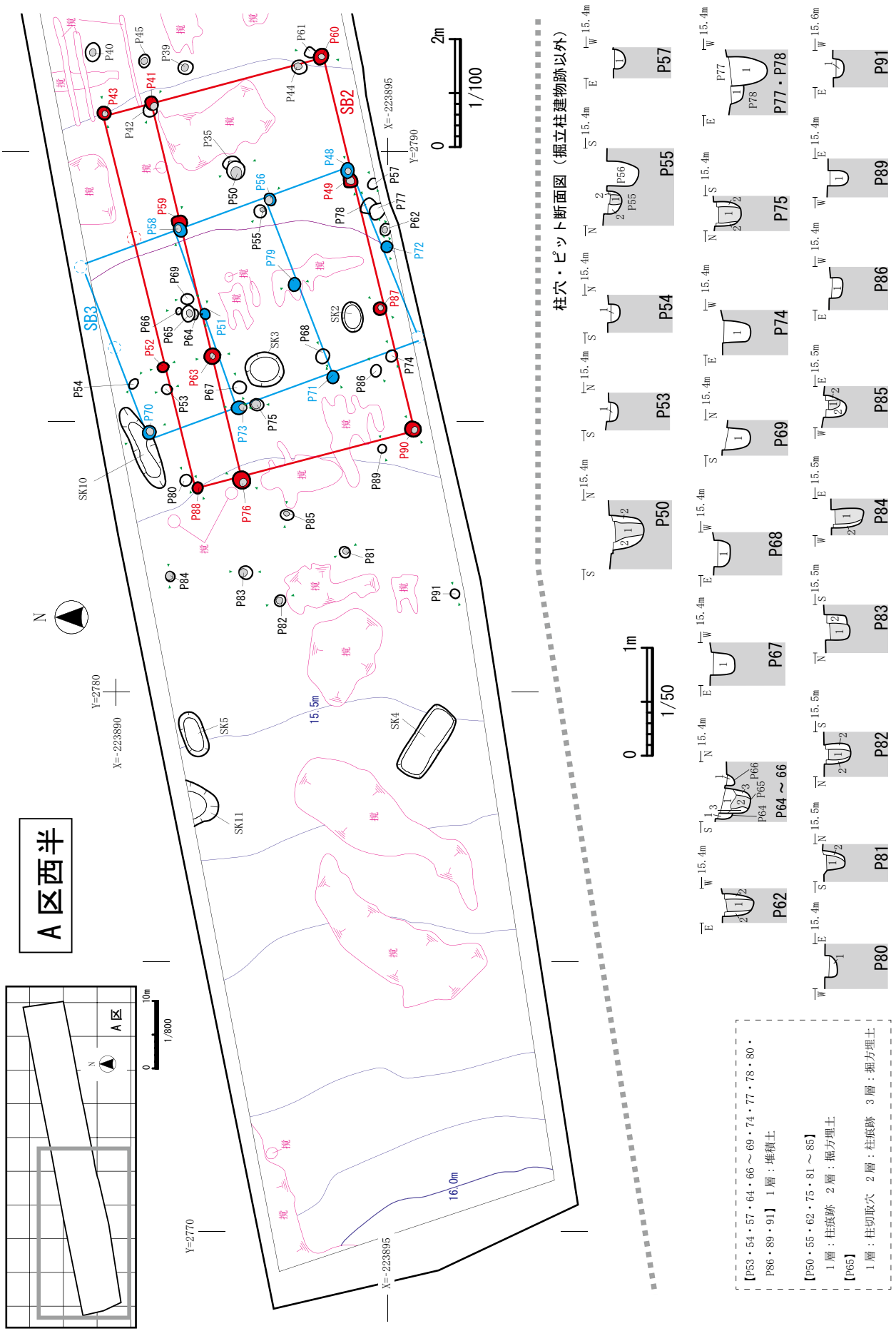
第26図 小平館跡（1次調査）A区東半 柱穴・ピット 遺構配置図・断面図



小平館跡 (1次調査) A区東半 柱穴・ピット検出状況 (北西から)



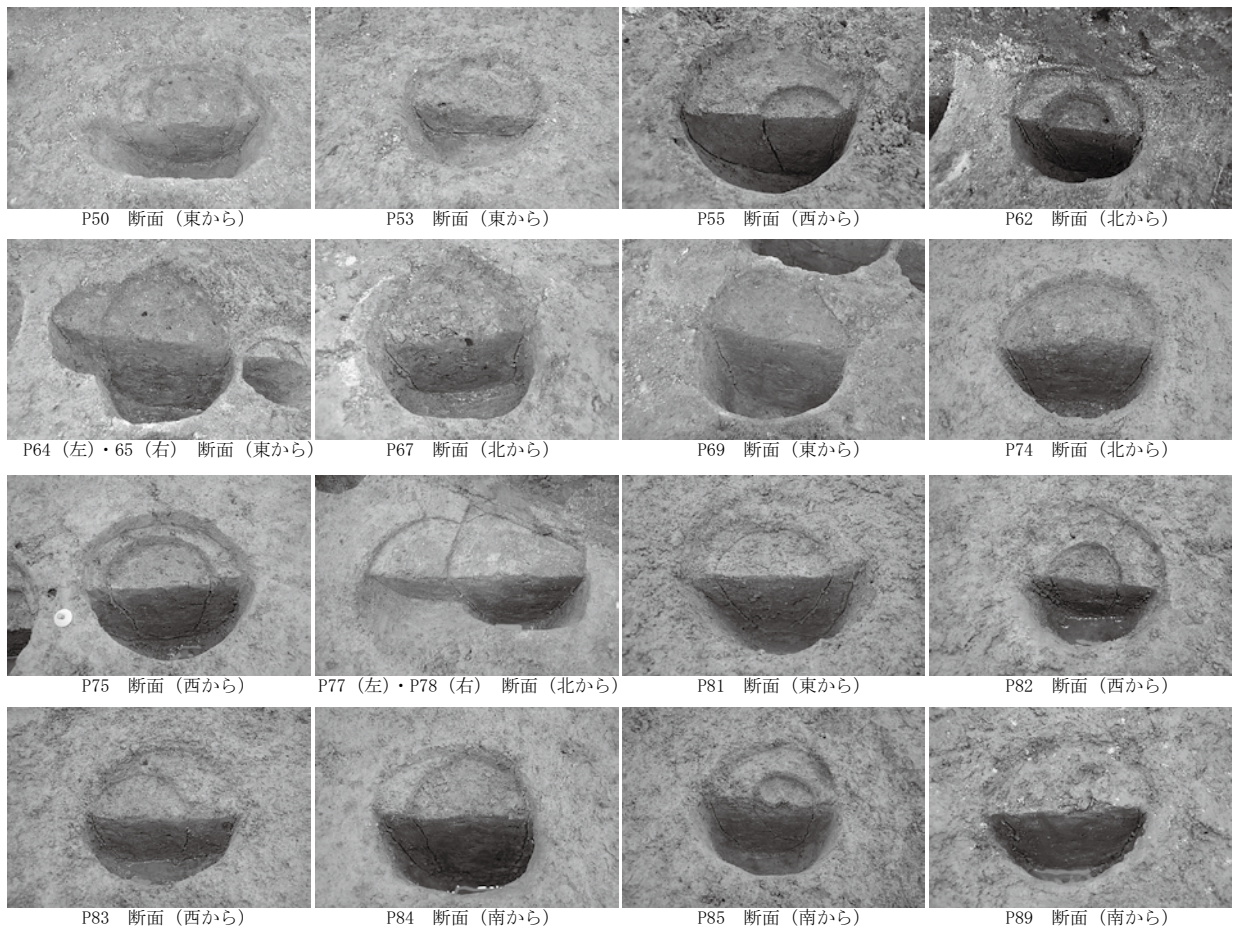
第27図 小平館跡 (1次調査) A区東半 柱穴・ピット検出状況、断面



第28図 小平館跡（1次調査）A区西半 柱穴・ピット 遺構配置図・断面図



小平館跡（1次調査）A区西半 柱穴・ピット検出状況（北から）



第29図 小平館跡（1次調査）A区西半 柱穴・ピット検出状況、断面

②掘立柱建物跡 (第23・28・30～33 図・第4・5 表)

ピットには、前述のとおり柱痕跡が認められる「柱穴跡」と、柱痕跡が認められない「小穴跡」があり、これらはいずれもある一定の範囲内に分布していることから、掘立柱建物や柱穴列などを構成する柱穴跡であった可能性が高いと考えられる。しかしながら、今回の調査区は調査面積が限られているため、掘立柱建物跡として認定できたものは3棟(SB1～3)のみである(建物として認定できなかったピット・柱穴は66個)。

第4表 小平館跡(1次調査) 掘立柱建物跡 属性表

遺構 No.	建物間数			平面規模						建物の方向		備考
	桁行	梁行	棟方向	桁行総長(m)/測定柱列/柱間寸法(m)			梁行総長(m)/測定柱列/柱間寸法(m)			建物傾斜角度/真北基準		
SB1	2以上	1	南北	3.2以上	西	1.6+1.6+～	4.2	北	4.2	東6°	N-6° -E	構成Pit: P15・17・25・26・27・30 建物調査区外に延びる
SB2	3	(1)+1	東西	7.2	南	2.4+2.4+2.4	4.1 [4.9]	西	0.8+4.1	西15°	N-15° -W	構成Pit: P41・43・49・52・59・60・ P63・76・87・88・90 SB3より古、P42・61より新 身舎北側に庇付く
SB3	3	2	南北	(5.3)	西	1.7+1.8+(1.8)	(3.4)	北	(1.8)+1.6	西20°	N-20° -W	構成Pit: P48・51・56・58・70・71・72・73・79 SB2・SK10より新 建物の一部調査区外に延びる

※建物間数の欄で「2+(1)」とあるのは「身舎2間、南側または東側に庇(または張出し)1間」、「(1)+2」とあるのは「身舎2間、北側または西側に庇(または張出し)1間」であることを示す。

※平面規模の()内の数値は推定値を示す。

※平面規模の桁行・梁行総長の数値は原則として「身舎部分の総長」を示した。このうち、庇・張出しの付く建物については、その下段の[]内に庇・張出しを含めた総長を表記した。

※柱間寸法は、東西方向のものは西から、南北方向のものは北から順に記した。柱間寸法のゴシック体数字は庇または張出しの柱間寸法を示す。

※建物が調査区外に延びているため、規模が不明な建物や柱の一部が残存していない建物については、下記のとおり表記した。

○調査区外に延びる建物・・・建物間数:「●以上×1間」、平面規模:総長を「●m以上」と表記、柱間寸法:「●+●+～」と表記。


○柱穴の一部が残存していない建物・・・総長・柱間寸法のうち、実際の計測値は●、推定値は(●)とし、総長(●)、(●+●)+(●)」と表記。


第5表 小平館跡(1次調査) 掘立柱建物跡 柱穴 属性表


遺構番号	柱穴掘方 (長軸・短軸:cm、底面標高:m)					柱 痕 跡				柱 類 型	備 考 (重複・出土遺物等)		
	平面形	長軸	短軸	残存深	底面標高	埋土	平面形	長軸	短軸			埋土	
SB1	P15	円形	31	30	14	12.6	抜穴3Aa・g	-	-	-	-	堆g:炭片少量、柱抜取	
	P17	円形	25	24	17	12.5	2Ac	円形	17	14	2A	あ	
	P25	円形	34	33	45	12.4	2Aa	円形	17	16	2A	あ	
	P26	円形	23	22	13	12.7	抜穴2Ac・g	-	-	-	-	堆g:炭片微量、柱抜取	
	P27	楕円形	28	22	5	12.8	6Aa	円形	12	10	2A	あ	
P30	楕円形	38	28	40	12.3	抜穴2Aa・g	-	-	-	-	柱抜取 堆g:炭片微量 P42より新		
SB2	P41	円形	24	20	25	14.8	3Aa	楕円形	14	12	2A	あ	
	P43	円形	25	24	22	14.9	3Aa	円形	11	11	2A	あ	
	P49	円形?	26	(18)	30	14.8	3Aa	円形	14	14	2A	あ	
	P52	円形	20	18	14	15.0	抜穴3Ab	-	-	-	-	柱抜取	
	P59	円形?	27	(13)	25	14.9	抜穴3Ac	-	-	-	-	SB3P58より古、柱抜取	
	P60	円形	30	29	35	14.7	2Ab	楕円形	13	10	1A	あ	
	P63	円形	33	32	35	14.9	掘埋1:3Aa 掘埋2:2Ac	楕円形	11	9	1A	あ	
	P76	円形	31	29	36	14.9	3Aa・g	円形	15	14	1A	あ	
	P87	円形	30	29	42	14.8	2Aa	円形	11	10	2A	あ	
	P88	円形	21	20	28	15.0	抜穴2Aa	-	-	-	-	柱抜取	
P90	円形	30	30	34	14.9	2Aa	楕円形	13	11	2A	あ		
SB3	P48	円形	28	24	27	14.8	切穴:3Aa・g 掘埋: 2Ac	円形	12	11	2A	い	SB2P49より新、柱切取 堆g:炭片
	P51	円形	19	18	25	15.0	抜穴3Ab	-	-	-	-	柱抜取	
	P56	円形	24	22	29	14.9	2Ab	円形	16	14	2A	あ	
	P58	円形	28	24	50	14.7	2Aa	楕円形	14	11	2A	あ	
	P70	円形	24	23	34	14.8	2Ac	円形	15	14	1A	あ	
	P71	円形	24	22	20	15.0	抜穴2Ab・g	-	-	-	-	堆g:炭片少量 柱抜取、砥石	
	P72	円形	22	22	14	15.0	抜穴3Aa・g	-	-	-	-	堆g:炭片少量 柱抜取	
	P73	円形	26	23	20	15.0	3Aa・g	円形	15	13	2A	あ	
	P79	円形	23	22	31	14.8	抜穴2Ac・g	-	-	-	-	堆g:炭片少量、柱抜取	

●ピット (柱穴・小穴) 類型

【柱類型】

あ: 柱痕跡が柱穴掘方
底面に接するもの 

い: 柱痕跡が柱穴掘方
底面まで至らないもの 

う: 柱痕跡が柱穴掘方
底面よりさらに下に延びるもの 

【柱痕跡・掘方の埋土・堆積土類型】

■土色

1: 黒褐色 (10YR3/2) 2: 暗褐色 (10YR3/3) 3: 暗褐色 (10YR3/4)
4: にぶい黄褐色 (10YR4/3) 5: 褐色 (10YR4/4) 6: 褐色 (10YR4/6)

■土性

A: シルト

■混入物

a: 地山ブロック多く含む b: 地山ブロック含む c: 地山ブロック少量含む
d: 地山ブロック微量含む e: 地山粒子含む f: 地山粒子少量含む
g: その他(上記以外のもの※)

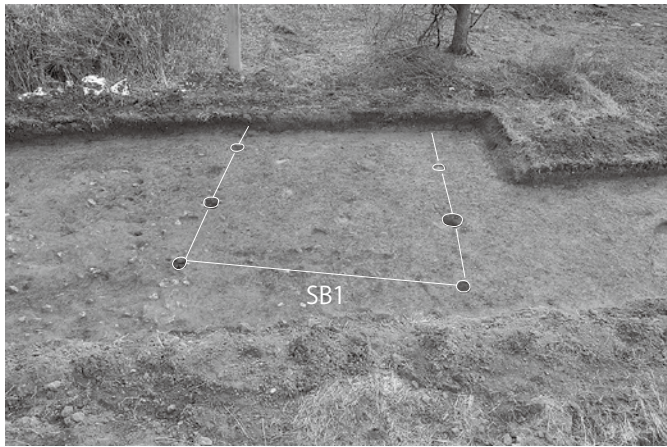
※gを選択した場合は備考欄に堆積土混入物を記載
※備考欄幅の関係から、下記の内容については記載を省略した
炭化物片→炭片

【記載例】

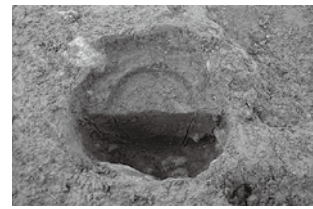
1Aa・・・土色: 黒褐色 (10YR3/1)、土性: シルト、混入物: 地山ブロック多く含む

●その他の記載事項

- 柱穴・ピットの計測値
 - ・(数値)は推定値を示す
- 柱穴・ピット掘埋の「埋土・堆土(堆積土)」記載事項
 - ・柱穴の場合は「掘方埋土」を意味する
 - ・「1層・2層」等の記載: 「柱穴・小穴」の埋土等が2層以上に分層した場合を示す
 - ・「抜穴」: 柱抜き取り穴の埋土・堆積土 / 「抜穴1」: 抜き取り穴1層の埋土・堆積土
 - ・「切穴」: 柱切り取り穴の埋土・堆積土 / 「切穴1」: 切り取り穴1層の埋土・堆積土
- 備考欄の記載事項
 - ・柱抜取: 柱が抜き取られているもの ・柱切取: 柱が切り取られているもの
 - ・その他、重複関係・出土遺物を記載



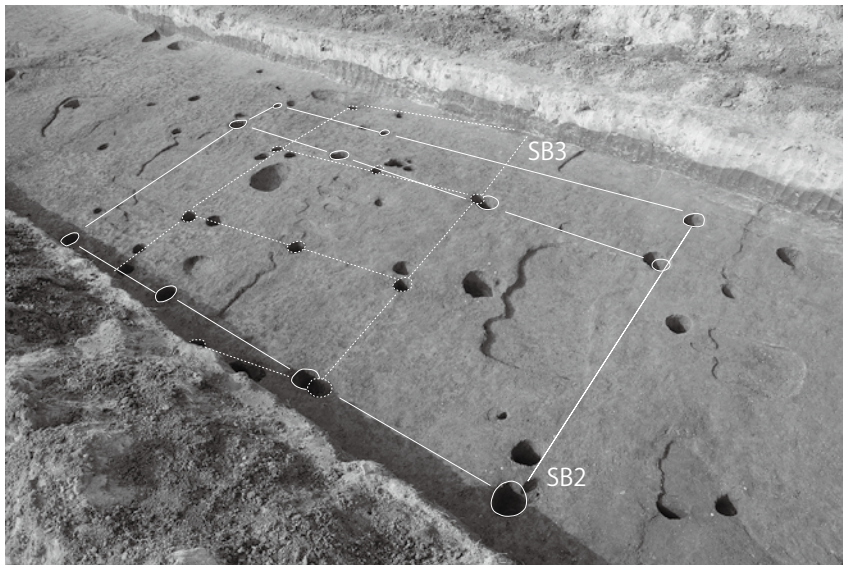
小平館跡 B 区 SB1 掘立柱建物跡 完掘状況 (北から)



SB1・P17 断面 (南から)



SB1・P25 断面 (南から)



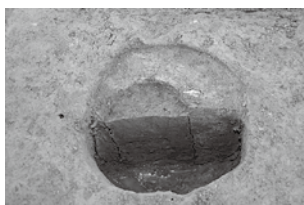
小平館跡 A 区 SB2・3 掘立柱建物跡 完掘状況 (南から)



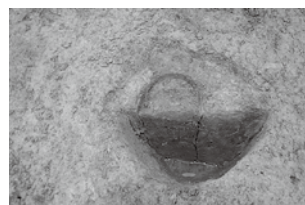
SB2・P49 (右)、SB3・P48 (左)
断面 (北から)



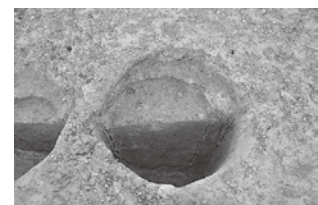
SB2・P59 (右)、SB3・P58 (左)
断面 (南から)



SB2・P43 断面 (南から)



SB2・P76 断面 (東から)



SB3・P56 断面 (西から)



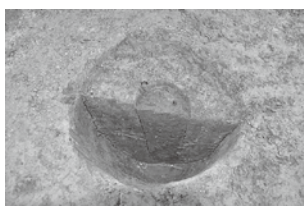
SB2・P60 (右)、P61 (右)
断面 (東から)



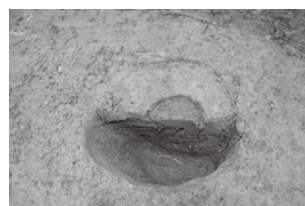
SB2・P87 断面 (北から)



SB3・P70 (左)、SK10 (右)
断面 (東から)



SB2・P63 断面 (東から)



SB2・P90 断面 (北から)

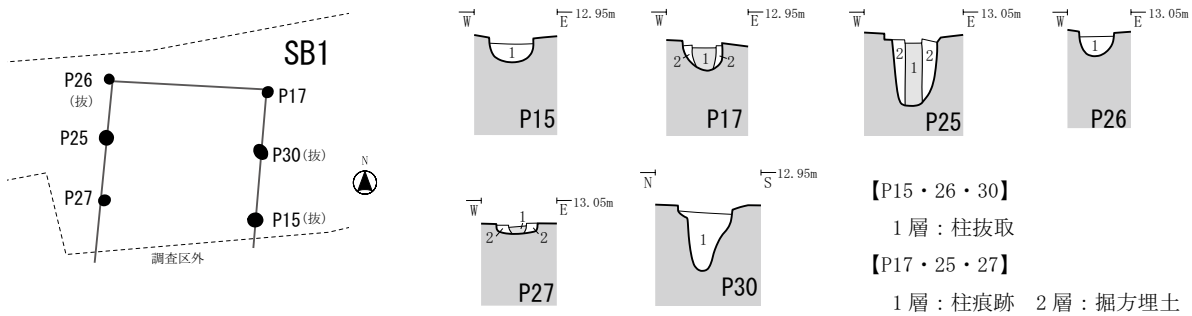


SB3・P73 断面 (西から)

第30図 SB1~3 掘立柱建物跡 完掘状況・柱穴断面

【SB1 掘立柱建物跡】(第23・30・31図、第4・5表)

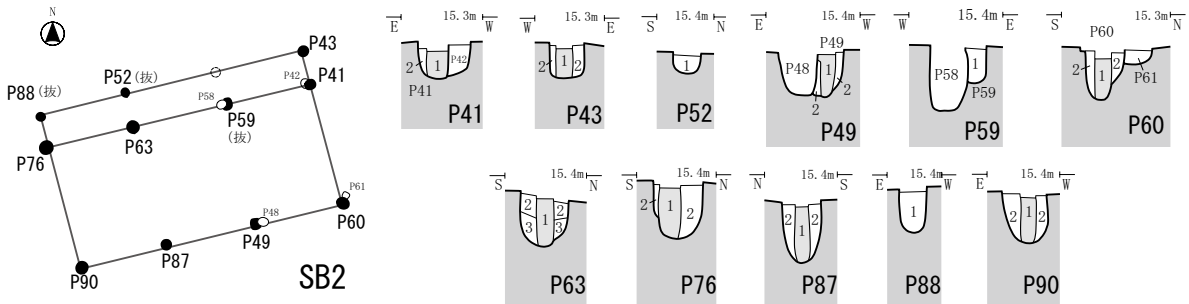
B区中央部付近で検出した。南北2間以上、東西1間の南北棟建物跡である。建物南側は、調査区外へ延びている。建物は、P15・17・25・26・27・30の6個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、3個(P17・25・27)で柱痕跡を確認し、3個(P15・26・30)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が西側柱列で総長3.2m以上、柱間寸法は北から1.6m・1.6m、梁行が北側柱列で総長4.2mである。方向は、真北に対して東に6°傾く(N-6°-E)。柱穴は長軸23~38cmの円形・楕円形で、深さは5~45cmである。柱痕跡は、長軸12~17cmの円形である。遺物は出土していない。



第31図 SB1掘立柱建物跡 平面・断面図 ※平面図S=1/200 断面図S=1/50

【SB2 掘立柱建物跡】(第28・30・32図、第4・5表)

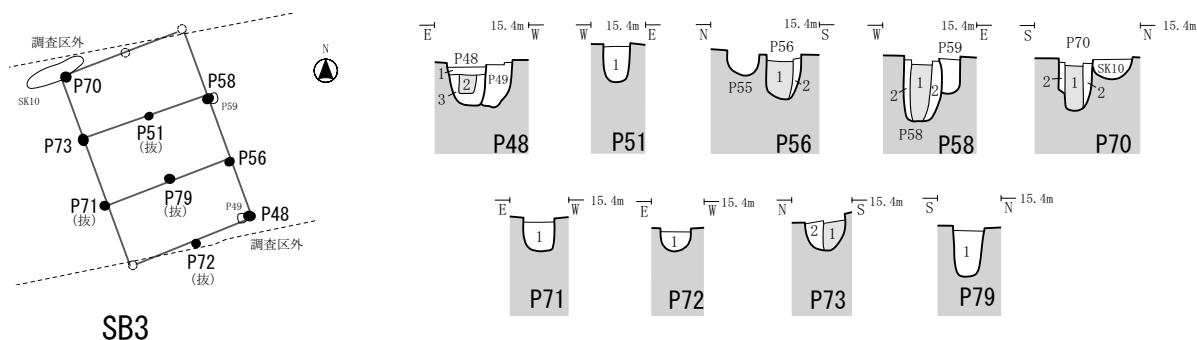
A区西側で検出した。東西3間・南北1間の身舎の北側に庇が1間付く東西棟建物跡である。SB3、P42・61と重複し、SB3より古く、P42・61より新しい。建物は、P41・43・49・52・59・60・63・76・87・88・90の11個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、8個(P41・43・49・60・63・76・87・90)で柱痕跡を確認し、3個(P52・59・88)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が南側柱列で総長7.2m、柱間寸法は西から2.4m・2.4m・2.4m、梁行が西側柱列で総長4.1mである。北側の庇の出は0.8mである。方向は、真北に対して西に15°傾く(N-15°-W)。柱穴は長軸20~33cmの円形で、深さは14~42cmである。柱痕跡は、長軸11~15cmの円形・楕円形である。遺物は出土していない。



第32図 SB2掘立柱建物跡 平面・断面図 ※平面図S=1/200 断面図S=1/50

【SB3 掘立柱建物跡】 (第28・30・33・34図、第4・5表)

A区東側で検出した。南北3間、東西2間の南北棟の総柱建物跡である。建物の北東部分・南西部分の一部は、調査区外へ延びている。SB2、SK10と重複し、これらより新しい。建物は、P48・51・56・58・70・71・72・73・79の9個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、5個(P48・56・58・70・73)で柱痕跡を確認し、4個(P51・71・72・79)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が西側柱列で総長5.3m(推定値)、柱間寸法は北から1.7m・1.8m・1.8m(推定値)、梁行が南側柱列で総長3.4m(推定値)、柱間寸法は西から1.8m(推定値)・1.6mである。方向は、真北に対して西に20°傾く(N-20°-W)。柱穴は長軸19~28cmの円形で、深さは14~50cmである。柱痕跡は、長軸12~16cmの円形・楕円形である。遺物はP71・1層から砥石1点(230g)(第34図4)が出土した。



【P51・71・72・79】1層：柱抜取 【P56・58・70・73】1層：柱痕跡 2層：掘方埋土
【P48】1層：柱切取 2層：柱痕跡 3層：掘方埋土

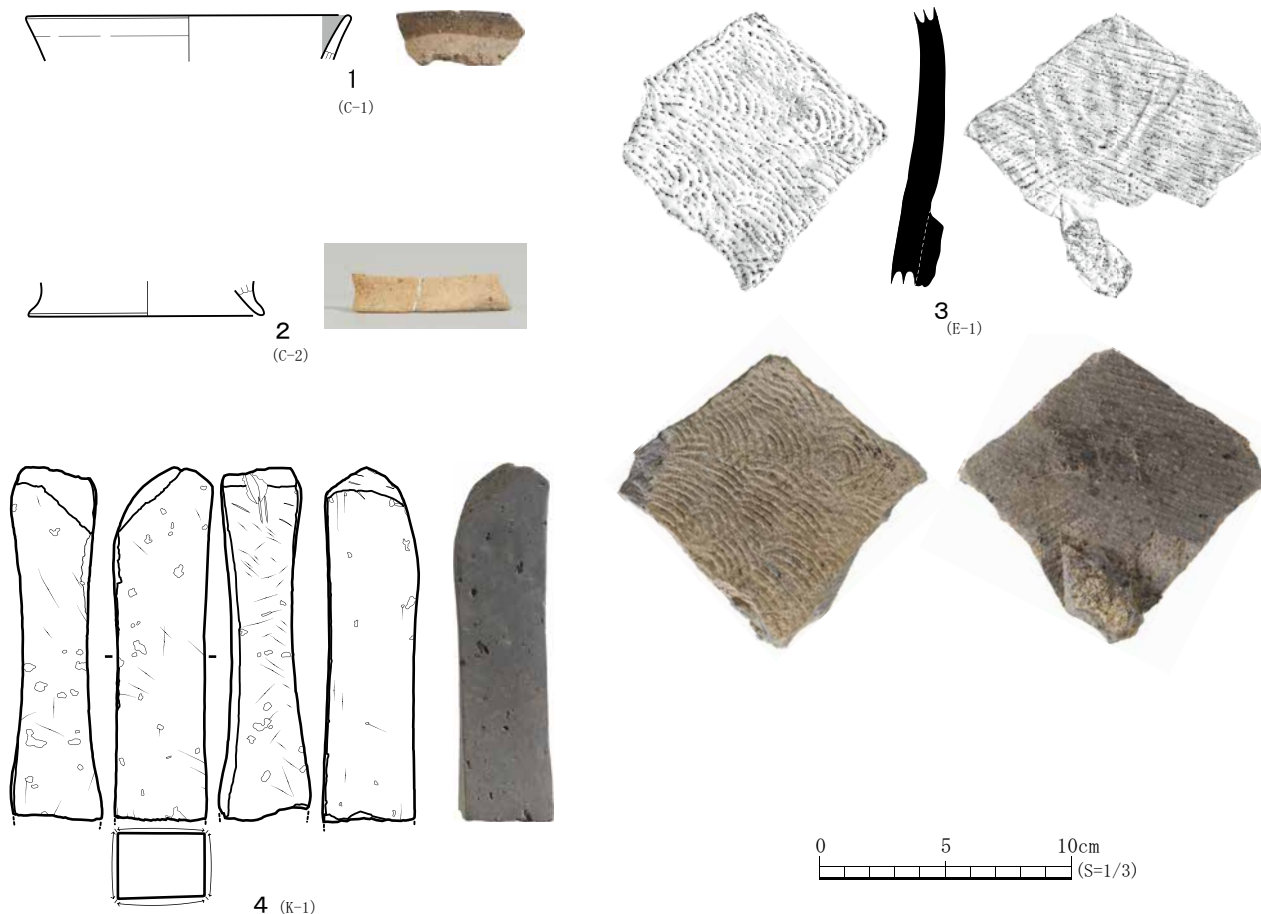
第33図 SB3掘立柱建物跡 平面・断面図 ※平面図S=1/200 断面図S=1/50



小平館跡(1次調査)作業風景

(4) その他の出土遺物 (第34図)

この他、確認調査時の T-13 遺構検出面で須恵器甕片 1 点 (185g) (第34図3) が出土した。



No.	遺構・層	種別	器種	残存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録				
							1	P24 堆積土	土師器	坏
2	SK2 1層	土師器	高台付坏	高台部	内外面：ロクロナデ・磨滅、色調：内外面・明黄褐色(10YR7/6)、法量：高台部径9.4cm・残存高1.4cm・器厚0.2~0.7cm	C-2				
3	T-13 検出面	須恵器	甕	胴部	外面：平行タタキ、内面：同心円当て具痕、色調：外面・灰色(N5/0)、内面・オリーブ灰色(N6/1)、法量：器厚0.7~1.2cm、外面：須恵器片付着	E-1				
No.	遺構・層	器種	石材	残存部位	法量				備考	登録
					長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)		
4	SB3・P71 1層	砥石	泥岩	完形	14.00	3.62	2.60	230.0	素材：剥片	K-1

第34図 小平館跡(1次調査)出土遺物

第IV章 総括

今回の調査で検出した遺物・遺構について、ここでは、その特徴や時期を検討し、本遺跡における各時代の特徴をまとめる。

1. 出土遺物の特徴と時期

出土した遺物は、土師器、須恵器、石器である。出土した土器類の総数は26点（約270g）、石器類の総数は1点（230g）である。このうち、土器類の内訳は、土師器が24点（約80g）、須恵器が2点（約190g）である。これらの出土遺物のうち、本報告では、第III章2（2）で示した抽出基準に基づき、土器類3点、石器類1点を図示した（第34図）。

(1) 土師器・須恵器

土師器には坏・高台付坏・甕があり、その大半がロクロ成形によるものである。坏類には内面黒色処理を施したものと赤焼土器がある。須恵器には壺類・甕がある。

これらの土師器・須恵器はいずれも小破片のため、詳細な年代を推定することは難しいが、土師器坏類の特徴等から、概ね平安時代のものと考えられる。

(2) 石器

石器は、砥石1点出土した。石材は泥岩である。町内の出土事例から、概ね中世以降のものと推定される。

2. 検出した遺構の特徴と時期

今回の調査では、掘立柱建物跡3棟、溝跡1条、土坑12基、ピット66個を検出した。ここでは、これらの遺構の堆積土の特徴・出土遺物・遺構の重複関係等からその時期について検討する。

(1) 掘立柱建物跡及びその他の柱穴・ピット

掘立柱建物跡3棟、柱穴・ピット66個を確認した。これらの柱穴・ピットは、掘方が円・楕円形を主体とし、長軸20～40cm前後の比較的小規模の掘方になるものが多く、掘方埋土は黒褐色・暗褐色シルト土を主体とするものである。このうち、建物として認定できなかった柱穴・ピットは、堆積土・埋土、掘方の形状・規模の特徴が、掘立柱建物跡（SB1～3）を構成する柱穴と類似しており、これらとほぼ同時期のもので同様の性格を有していたと推定される。

掘立柱建物跡には、3間×1間で庇が付くもの（SB2）、3間×2間（SB3）、2間以上×1間（SB1）のものが確認された。その他の柱穴・ピットは、これらの建物周辺に特に多く分布している傾向が認められた。今回の調査区は調査面積が限られていたため、掘立柱建物跡として認定できたものは3棟のみであるが、その他の柱穴・ピットについても掘立柱建物や柱穴列などを構成する柱穴跡であった可能性が高く、今回の調査区周辺にはさらに建物等が存在し、これらが屋敷地を構成していたと考えられる。

掘立柱建物跡（SB1～3）や柱穴・ピットの所属時期については、SB3掘立柱建物跡の柱穴（P71）で砥石、その他の柱穴・ピットで土師器片・須恵器片が少量出土しているのみであり、遺物のみで年代を特定することは難しい。そこで、周辺の町内の調査事例についてみると、こうした比較的小規模の柱穴・ピットの特徴は、中・近世以降の掘立柱建物跡を構成する柱穴に類似しており、今回検出された建物跡・柱穴・ピットについても概ね同様の時代のものと推定される。加えて、今回の調査区は、中世の小平館跡の東端部に位置し、その約100m東側に位置する北経塚遺跡では、13世紀後半～14世紀前半以降の屋敷地が確認されている（山田ほか2010・2013）。こうした周辺の遺跡との位置関係や歴史的環境を踏まえると、今回の調査で確認

された建物跡、柱穴・ピットの多くは、中世の小平館跡や北経塚遺跡と関連する遺構である可能性が十分想定でき、その所属時期については、現段階では中世以降に属するものとして捉えておきたい。

(2) 溝跡

溝跡は1条 (SD1) 確認した。SD1 からは平安時代の土師器片・須恵器片が出土しており、少なくとも平安時代以降の遺構であると考えられる。遺構の特徴についてみると、SD1 の主軸方向は、その西側で確認されている掘立柱建物跡とほぼ同様で、堆積土の特徴についても黒褐色・暗褐色シルト土を主体とし、建物や周辺の柱穴・ピットと類似している。また、溝の周辺では柱穴・ピットの分布が希薄である。このことから、SD1 溝跡は、掘立柱建物跡と関連性の高い遺構であると考えられ、これらと同時期の遺構である可能性が高い。溝跡の性格については、建物と溝跡の位置関係から屋敷地を区画するための溝である可能性が想定される。

(3) 土坑

土坑 12 基 (SK1~12) 確認した。土坑の平面形には、円形 (SK1・3)・楕円形 (SK2・5)・隅丸長方形 (SK4・6~9)・長楕円形 (SK10)・不整形 (SK12)・不明 (SK11) などがある。SK4・5・10 については、その形状・堆積土の特徴から、土坑墓の可能性が考えられる。このうち、遺物が出土したのはSK2のみで、その特徴から平安時代以降のものと推定される。この他の土坑については、遺物が出土していないため、時期不明であるが、遺構の重複関係から、SK9・10は掘立柱建物跡・柱穴・ピット、SK6はSD1溝跡より古い遺構であることが確認されている。また、これらの土坑は、堆積土の特徴から、褐色 (7.5YR4/3) シルト土を主体とするもの (SK3・6~9・11) と、黒褐色・暗褐色シルト土 (10YR3/2~3/4) を主体とするもの (SK1・2・4・5・10・12) に大きく分けることができ、両者は時期の異なる遺構である可能性が考えられる。

以上のように、今回の調査で確認された土坑については、出土遺物がほとんど認められないため、時期不明のものが多いが、調査区内の出土遺物や、建物跡・柱穴・ピット、溝跡との重複関係を考慮すると、建物と同時期もしくはそれ以前 (平安時代) のものが混在していると考えられる (註)。

3. まとめ

- ・小平館跡は、阿武隈山地から東に延びる標高 12~32m の中位・低位段丘上の平坦面・緩斜面に立地する。今回の調査では、掘立柱建物跡 3 棟、溝跡 1 条、土坑 12 基、ピット 66 個を検出し、土師器、須恵器、砥石が出土した。
- ・掘立柱建物跡 (SB1~3) 及びそれ以外の柱穴・ピットは、その特徴や周辺の調査事例から概ね中世のものと推定される。溝跡 (SD1) についても、その分布や堆積土・主軸方向から同時期の可能性があり、これらが屋敷地を構成していたと考えられる。
- ・今回の調査区西側の丘陵頂部には小平館跡の主郭が存在する。また、調査区の約 100m 東側に位置にする北経塚遺跡では中世の屋敷地が確認されている。以上のことから、今回の調査区を含む小平館跡東側一帯には、館跡に関連する中世の屋敷地が分布していた可能性が考えられる。
- ・土坑 (SK1~12) は、出土遺物や重複関係から概ね中世のものとそれ以前のものと想定される。

註 小平館跡の範囲内では、今回の調査区の西側でも発掘調査が実施されており (小平館跡 2・3 次調査:平成 24・25 年度調査)、そこからは、古墳時代前期の遺構が確認されている。今回確認した時期不明の遺構の中には、古墳時代前期の遺構も含まれている可能性がある。また、近隣の北経塚遺跡では、縄文時代前期の遺構が確認されており、これらの堆積土は褐色シルト土 (7.5YR4/3 前後) を主体としている (山田ほか 2010・2013)。今回の調査区で確認された土坑の中には、堆積土の面で北経塚遺跡の遺構と類似するもの (SK3・6~9・11) があり、これらの中には縄文時代前期の遺構が含まれている可能性も想定される。

引用・参考文献

- 青山博樹ほか 2000 「宮城県山元町合戦原古墳群の測量調査」『宮城考古学』第2号
- 吾妻俊典 1994 「多賀城跡周辺における須恵器製作技法の変化」『古代の土器研究 律令的土器様式の西・東6 須恵器の製作技法とその転換』
- 天野順陽・笠原俊哉 亶理町教育委員会 1998 『十文字館跡』亶理町文化財調査報告書第6集
- 飯村均 2009 『中世奥羽のムラとマチ 考古学が描く列島史』東京大学出版会
- 石黒伸一郎 2005 「山元町の板碑と蔵王町の中世石塔」『宮城考古学』第7号
- 伊藤晶文 2006 「仙台平野における歴史時代の海岸線変化」『鹿児島大学教育学部紀要自然科学編』57
- 岩見和泰・佐藤憲幸 1991 「合戦原遺跡」『合戦原遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第140集
- 氏家和典 1957 「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』14
- 岡田茂弘・桑原滋郎 1974 「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」『研究紀要I』宮城県多賀城跡調査研究所
- 小山正忠・竹原秀雄編 1973 『新版標準土色帖』2010年版
- 鍛冶一郎 1971 「合戦原古窯址群」『山元町誌』
- 加藤道男 1989 「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢II』
- 窪田忍 1995 『狐塚遺跡』山元町文化財調査報告書
- 桑原滋郎 1976 「須恵系土器について」『東北考古学の諸問題』東北考古学会
- 小井川和夫 1984 「いわゆる赤焼土器について」『東北歴史資料館研究紀要』第10巻
- 佐々久・志間泰治・氏家和典 1971 「井戸沢横穴古墳群発掘調査報告書」『山元町誌』
- 白鳥良一 1980 「多賀城出土土器の変遷」『研究紀要VII』宮城県多賀城跡調査研究所
- 白鳥良一 1982 「土器」『多賀城跡政庁跡本文編』宮城県多賀城跡調査研究所
- 紫桃正隆 1974 『史料 仙台領内古城・館』第四巻
- 志間泰治 1956 「宮城県亶理郡における考古学上の遺跡」『宮城県の地理と歴史』1
- 志間泰治 1975 『亶理の古墳』
- 志間泰治 2007 『彙報1 歴史を掘り起こす』
- 関敦司 2004 『北経塚遺跡』山元町文化財調査報告書第3集
- 仙臺叢書出版協会 1893 『仙臺叢書 封内風土記 卷ノ九』
- 仙臺叢書刊行会 1923 「仙臺古城記」『仙臺叢書』第4巻
- 千葉正康 1993 「狐塚遺跡」『狐塚遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第157集
- 東北古代土器研究会編 2005 『研究報告2 東北古代土器集成-古墳後期~奈良・集落編<宮城>』
- 東北中世考古学会編 2001 『東北中世考古学叢書2 掘立と堅穴 中世遺構論の課題』高志書院
- 初鹿野博之・山口淳・千葉直樹・大坂拓 2012 『西石山原遺跡ほか-常磐自動車道建設関連遺跡調査報告書I-』宮城県文化財調査報告書第230集
- 初鹿野博之 2013a 「涌沢遺跡」『発掘された日本列島 2013 新発見考古学速報』文化庁
- 初鹿野博之 2013b 「宮城県山元町内手遺跡・上宮前北遺跡」『第39回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』
- 初鹿野博之 2014 「宮城県山元町熊の作遺跡」『第40回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』
- 初鹿野博之 2015 「熊の作遺跡と亶理郡南部の遺跡群」『第41回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』
- 引地弘行 2002 「館の内遺跡」『名生館遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第188集
- 福島考古学会中近世部会編 2000 『福島県考古学会中近世部会平成12年度研究セミナー 東北地方南部における中近世集落の諸問題』
- 藤田至則・加納博・滝沢文教・八島隆一 1988 『角田地域の地質』地域地質研究報告 地質研究
- 藤本展子・松本秀明 2012 「阿武隈川付近における浜堤列の分類とその形成時期に関する再検討」『人間情報学研究』第17巻
- 文化庁文化財部記念物課編 2010 『発掘調査の手引き-集落遺跡発掘編-』
- 文化庁文化財部記念物課編 2010 『発掘調査の手引き-整理・報告書編-』
- 松本秀明 1984 「海岸平野にみられる浜堤列と完新世後期の海水準変動」『地理学評論』57
- 宮城県考古学会編 2010 『平成22年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
- 宮城県考古学会編 2011 『平成23年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
- 宮城県考古学会編 2012 『平成24年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
- 宮城県考古学会編 2013 『平成25年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
- 宮城県考古学会編 2014 『平成26年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
- 宮城県企画部土地対策課編 1988 『土地分類基本調査 角田』
- 宮城県史編さん委員会 1970 「仙台領古城書立之覚」『宮城県史』32 資料編9
- 村田晃一 1992 「多賀城周辺における奈良・平安時代の須恵器生産」『東日本における古代・中世窯業の諸問題』
- 村田晃一 1994 「土器からみた官衙の終末」『古代官衙の終末をめぐる諸問題』
- 村田晃一 1995 「宮城県における10世紀前後の土器」『福島考古』第36号
- 柳澤和明 1994 「東北地方の施釉陶器」『古代の土器研究-律令的土器様式の西・東3 施釉陶器-』
- 山田隆博 2008 『企画展図録 亶理郡の古墳時代』山元町歴史民俗資料館
- 山田隆博 2015a 「山元町中筋遺跡の津波痕跡」『宮城考古学』第17号
- 山田隆博 2015b 「山元町の復興調査と合戦原遺跡の横穴墓群」『古代国家形成期の地域社会-山元町の調査から-』平成27年度宮城県考古学会総会・研究発表会資料
- 山田隆博・村上裕次・山口淳 2010 『北経塚遺跡』山元町文化財調査報告書第4集
- 山田隆博・藤田祐・佐伯奈弓 2013 『北経塚遺跡』山元町文化財調査報告書第5集
- 山田隆博・藤田祐・佐伯奈弓 2014 『的場遺跡』山元町文化財調査報告書第6集
- 山田隆博・藤田祐 2014 『石垣遺跡』山元町文化財調査報告書第7集
- 山田隆博・丹野修太 2014 『日向北遺跡』山元町文化財調査報告書第8集
- 山田隆博・藤田祐 2015 『日向遺跡』山元町文化財調査報告書第9集
- 山田隆博・藤田祐・佐伯奈弓 2015 『中筋遺跡』山元町文化財調査報告書第10集
- 山元町史編纂委員会編 1971 『山元町誌』
- 山元町史編纂委員会編 1986 「中島貝塚」『山元町誌 二巻』
- 吉野武 2015 「熊の作遺跡出土の木簡と墨書土器」『第41回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』
- 渡部義顯 1931 『亶理郡史』

報告書抄録

ふりがな	こだいらたてあと I							
書名	小平館跡 I							
副書名	小平地区宅地造成工事に係る発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	山元町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第11集							
編著者名	山田隆博							
編集機関	山元町教育委員会							
所在地	〒989-2203 宮城県亶理郡山元町浅生原字日向 12-1 電話 0223-37-5116							
発行年月日	平成 27 (2015) 年 6 月 30 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
こだいらたてあと 小平館跡	宮城県 亶理郡 山元町 小平字北	043621	14020	37度 58分 58秒	140度 51分 54秒	2013.02.20 ～02.28	425 m ²	小平地区宅地造成工事に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
小平館跡	屋敷跡	中世	掘立柱建物跡、溝跡、柱穴・ピット		砥石	掘立柱建物跡 3 棟、溝跡 1 基、柱穴・ピット 66 個		
	散布地	時期不明	土坑		—	土坑 12 基		
	散布地	平安時代	—		土師器・須恵器	—		
要約	<ul style="list-style-type: none"> 小平館跡は、宮城県南東部の亶理郡山元町小平字北地内に位置し、阿武隈山地から東に延びる標高 12～32m の中位・低位段丘上の平坦面・緩斜面に立地する。今回の調査では、掘立柱建物跡 3 棟、溝跡 1 条、土坑 12 基、ピット 66 個を検出し、土師器、須恵器、砥石が出土した。 掘立柱建物跡 (SB1～3) 及びそれ以外の柱穴・ピットは、その特徴や周辺の調査事例から概ね中世のものと推定される。溝跡 (SD1) についても、その分布や堆積土・主軸方向から同時期の可能性があり、これらが屋敷地を構成していたと考えられる。 今回の調査区西側の丘陵頂部には小平館跡の主郭が存在する。また、調査区の約 100m 東側に位置にする北経塚遺跡では中世の屋敷地が確認されている。以上のことから、今回の調査区を含む小平館跡東側一帯には、館跡に関連する中世の屋敷地が分布していた可能性が考えられる。 土坑 (SK1～12) は、出土遺物や重複関係から概ね中世のものとそれ以前のものとして推定される。 							

山元町文化財調査報告書第 11 集

小平館跡 I

— 小平地区宅地造成工事に係る発掘調査報告書 —

平成 27 年 6 月 30 日発行

発行 山元町教育委員会

宮城県亶理郡山元町浅生原字日向 12-1

TEL0223-37-5116/FAX0223-37-0119

印刷 株式会社 東北プリント

宮城県仙台市青葉区立町 24-24